
エヴァンゲリヲン シークレット

ME-GA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エヴァンゲリオン シークレット

【Nコード】

N9808J

【作者名】

ME-GA

【あらすじ】

西暦2015年，日本。

セカンドインパクト。それは2000年9月13日。南極に巨大な隕石の落下による異常気象の数々により世界は崩壊しかかっていた。しかし，人類はわずか15年という短い期間の中で元の生活を取り戻した。

少年・碓シンジは今日も第3新東京市にて気の抜けない生活を送っていた。

『新世紀エヴァンゲリオン』や『エヴァンゲリオン・新劇場版』，
オリジナルを加えての新しいエヴァンゲリオン。

4号機，発進 part. 1

「エヴァ4号機を日本に回すだど!?!」

「ああ，『ゼーレ』からの要請だ。」

「しかし，エヴァは条約で『3体までしか保有できない』と!」

「『ゼーレ』が特別に許可をくれた。それだけここの守備を徹底させたいのだろう。」

「なあ，シンジ。」

「なんだよ，ケンスケ。」

「今日『エヴァンゲリオン4号機』が日本に来るんだろ?」

「何も聞いてないけど・・・。」

「なんや，シンジにも伝わってないんか?」

「僕にも?」

「綾波にも式波にも真希波にも聞いたんだけど3人とも知らないって。」

「へえ。」

彼は碇シンジ。『汎用人型決戦兵器人造人間エヴァンゲリオン初号機・テストタイプ』のパイロットだ。

そして他の二人はシンジのクラスメイトの鈴原トウジ，相田ケンスケ。

話に出てきた3人は

綾波レイ。『汎用人型決戦兵器人造人間エヴァンゲリオン0号機・プロトタイプ』のパイロット。

式波・アスカ・ラングレー。『汎用人型決戦兵器人造人間エヴァンゲリオン2号機・プロダクションモデル』のパイロット。

真希波・マリ・イラストリアス。『汎用人型決戦兵器人造人間エヴァンゲリオン3号機・プロダクションモデル』のパイロット。

『アンゲリオン5号機・プロダクションモデル』のパイロット。

「ミサトさんからは何も聞いてないけど・・・？」

「ケンスケ、お前いい加減親父のデータ見るのやめろや。」

「だって気になるだろ？もしパイロットがいなかったら乗せてくれるかも！」

シンジは目を輝かせるケンスケを苦笑して見守るしかなかった。

「そういえば、ミサトさんが学校終わったら出かけるって言ってたからそれかな。」

「絶対それだよ！なあシンジ。オレたちも連れてってよ！」

「う、うん。」

太平洋。

「まったく。シンちゃんにお友達ができたのは嬉しいけどこういう軍機密のことにまで連れてくるなんて。」

「ご、ごめんなさい…。」

「ていうか、あんた達が勝手についてきたんじゃないの？」

「た、確かにお願いしたけど、許可したのはシンジだろ！」

「シンジはお願いされたら断れないからねえ。」

シンジは言われたい放題であった。

「お、見えたわね。」

そこには6隻の空母と50隻の軍艦、そして『EVA-04 PR D』と書かれた戦艦があった。

「あんたらが日本のエヴァのパイロット？」

そこにはいつの間こちらの艦にいたのか黒髪の少年が立っていた。

「こんにちは、金代君。紹介するわね、この子が『エヴァンゲリオン 次世代試験 4号機』のパイロットの金代リクヤ君。」
「どうも。金代リクヤです！よろしく！」

少年・金代リクヤは友好的な笑顔を向けた。

「えっと、僕は碓シンジです…。」

「わたしは式波・アスカ・ラングレーです。よろしくね。」

「真希波・マリ・イラストリアスです！5号機のパイロットだよ♪」

「ワイは鈴原トウジや。よろしゅうな。」

「俺は、相田ケンスケ。よろしく。」

「うんうん。みんな顔合わせもすんだし、日本に着くまでゆっくりしますか！」

そうして各々は好きなように行動していった。

ある者はエヴァンゲリオン4号機を見に行き、

ある者は水しぶきを浴びて涼んでいたり、と好きなように楽しんでいた。

「葛城一尉。前方2 km地点にて未確認高速接近体を確認。NERVにて解析した結果、使徒と断定。」

「なんですって！」

『各班、第一種戦闘配置。エヴァ4号機パイロット、金代リクヤはエヴァに搭乗してください。』

「うはー。呼びだ。んじゃ！おめーら！俺のデビュー戦、しっかり見とけよ！！！」

そう言って、リクヤはエヴァの元へ駆けていった。

『エヴァ4号機、エントリープラグ、固定完了。注水。A10神経接続異常なし。初期コンタクトすべて問題なし。』

空中挺進専用S型装備、ドッキング正常。エヴァ4号機、システムオールグリーン。』

「うっしあ！エヴァ4号機、発進しまーす！！！！！」

その瞬間、銀色の機体が空中へと飛び立った。

4号機，発進 part. 1（後書き）

ついに発進したエヴァンゲリオン4号機。

その機体の双眼が使徒の姿を捉えた。

使徒の姿は魚のような形をした巨体であった。

次回，『4号機，発進 part. 2』

4号機、発進 part. 2

輝く銀色のフォームは空を駆け、軽く旋回した後、再び元の位置に戻る。

「ミサトさん、武装はありますか？」

通信を使ってミサトに尋ね、軽く辺りを見回した。

「第41番艦にバレットライフルが積んであったわ！使って。」

「ラジャー！」

そして再び機体を駆り、指定された艦へと飛ぶ。

武装を受け取り、戦闘に備える。

「4号機、まもなく目標と接触！」

すぐにライフルを構え、使徒の攻撃を待つ。

その刹那……。

「うわっ！！！」

使徒はそのまま4号機に向かって突進。

4号機を口に挟み、そのまま海中へ消えた。

「金代君！」

「大丈夫です！！」

モニター越しにパイロットの声が通り、無事であることが確認される。

「金代君、敵のコアは確認できる！？」

しばし沈黙が訪れるが、すぐにイヤホン越しに声が響く。

「はい！使徒の口の中にコアを確認しました！」

「口！？」

「いやだ、キモチワルイ！」

アスカは肩を抱いてブルリと震えた。

マリも少し青い顔をする。

「金代君！今の状態でコアは破壊できる？」

「ライフル落としちゃって……。無理そうです。」

ミサトはしばらく考え込み爪をかんだ。

その間に4号機はどんどん引き離される。

「おいおい，大丈夫かいな！？」

「メモリ替えとこ。」

「ケンスケ……，緊張感ないね。」

しかし，そこにミサトの声が響く。

「そうだわ！！！」

ミサトの考えついた作戦とは……。

「4号機による使徒の口の開口。その後，戦艦2隻による直接射撃，及び自爆により使徒を迎撃します。」

「でも，ミサト。使徒の口までどうやって戦艦を運ぶのよ。」

ミサトは再び考えた後，口を開いた。

「そうね，4号機には一端浮上して貰って，アンビリカルケーブルを接続。そのラインをつたって戦艦を潜行させるわ。いいわね，金代君！」

「はい！」

4号機はすぐさま使徒の牙をプログナイフで切断，空母へと着地した。

「4号機，アンビリカルケーブル接続完了。」

「了解！総員，衝撃に備えて！」

その瞬間，使徒は再び4号機を口にくわえ，海中に消えた。

「4号機，及び目標。水深4000m地点に到達！」

「戦艦2隻を潜行開始。4号機は使徒の口を開口して！」

「了解！」

4号機は，すぐに使徒の口へ手をかけ使徒の口を開口させる。その間に，戦艦はどんどん潜行する。

「使徒，接触まであと1000m！」

しかし、使徒の口はいまだ開口されない。

「接触まで500m!」

「金代君！まだなの！」

「開けええええええええええ！！！」

「残り50m！」

その瞬間、4号機の顎部ジョイントは外れ、4号機はフルパワーを発動した。

ドオオオオン！！！！！！！！！！

使徒の口は開口され、直接射撃及び、自爆は見事使徒に命中した。

「使徒，消滅を確認。」

「4号機パイロット、生命に異常ありません。」

「やったわ！」

ミサトはガッツポーズをした。

「すごい・・・。」

「あんな戦い方するなんて、無茶するわねえ。」

その後、無事に4号機は日本へ搬送された。

「使徒は、何故4号機を狙ったと思う？」

冬月は、ゲンドウへと尋ねた。

「分らん。使徒ならば迷わずこの第3新東京市に来るはず。しかし、4号機を狙ったということは。」

「4号機にアダムに繋がる何かがある、ということか？」

「そういうことになる。」

4号機, 発進 part. 2 (後書き)

太平洋にて無事に使徒を撃破し、日本へ搬送された4号機。
パイロット, 金代リクヤはシンジ達の家へと来ていた。

次回, 「リクヤ, 襲来 part 1」

リクヤ、襲来 part 1 (前書き)

無事に第7使徒を撃破したNERVとエヴァンゲリオン4号機。
日本に搬送されたエヴァ4号機はNERV本部に配属を終える。
シンジは我が家に帰宅するが家の前には見慣れない荷物が・・・。

リクヤ、襲来 part 1

「・・・・・・・・・・？」

シンジは我が家の前で立ち往生していた。

そこには荷物があるからだ。見慣れない荷物が。どかそうにも重くて動かせない。

「おう！シンジ！どうしたんだ？」

すると横には例の金代リクヤがいた。

「どうしたも何も、この荷物のせいで家には入れないんだ。ていうかなんでいるの？」

「へえ、もう届いてたのか。俺の荷物。」

「・・・・・・・・・・え？」

聞きづてならない言葉が聞こえた気がする。

「俺、ここに住むから。」

「はあ!？」

碇シンジは珍しく驚愕の声を上げていた。こんな声、滅多に聞けるものではない。

「いやあ、NERV本部に住んでもいいんだけどさ、殺風景だし、寂しいんだよなあ。」

「え、いや知らないけど・・・。」

すると、そこにジャストタイミングでアスカが来たのである。

「あら、リクヤじゃない。どしたの？」

「あー、俺も今日からミサトの家に住むから。」

「はあ!？」

さっきと同じです。

「いやー、悪いわねえ。なかなか連絡取ろうにも、二人ともつながんなくてさあ。」

あっはっは、と言わんばかりに大声で笑い、ビールに口を付ける思いきり仕事モードOFFのミサト。

「ホント、ミサトの家は面白いところばっかだなあ。」

「褒め言葉としてうけとっとくわ。」

しかし、若干2名は違うことを考えていた。

（（ハイテンションが二人に・・・。））

「そういえば、シンジはもう、使徒を3体も倒してるんだってな？」

「うん、まあね。」

「でもさあ、私が日本に来てから全然使徒は来ないのよね。さしずめ、私の力に圧倒されてるのかしら？」

と、アスカはお得意の自画自賛で己の凄さをアピールする。

「聞かせてくれよ、どんな感じだったか。」
「う、うん・・・。」

そうして、シンジは今までの戦いをぽつぽつと話し始めた。

使徒，襲来 part. 1

『現在非常事態宣言がだされたため、すべてのライフラインがストップしています。くり返します・・・』

ガチャリ

乱暴に受話器を置き、時計に目をやる。

「まったく。やっぱり通じないや。」

彼の名前は碇シンジ。

この度、彼の父親の碇ゲンドウに呼ばれてここ第3新東京市へと足を運んでいた。

カバンから写真を撮りだし、そこに写っている女性を見る。

葛城ミサト。それが彼女の名前らしい。

「待ち合わせは無理か・・・。しょうがない、シェルターに行こう。」

しかし、シンジの歩みは地響きによって止められた。

「な、なんだ？」

地響きのする方を見ると・・・。

「なんだ!？」

そこには、骸骨の顔をあしらった仮面を付けた黒い巨人がいた。
そして、直後シンジの上を巡航ミサイルが飛び、
巨人めがけて飛んでいく。

「じゅ、巡航ミサイル!？」

ミサイルは全て巨人に命中、しかし、巨人は以前その姿を保ったまままだ。

巨人の周辺を旋回していたVTOLが巨人の手と思われる部位から光る槍状のものが発射され、撃墜されシンジのすぐそばに落ちてくる。

巨人は、頭上にエンジェル・ハイロウをつくり大きく跳躍、VTOLを踏みつぶす。

「うわあっ！」

爆発に巻き込まれるかと思われたが、間一髪、青のルノーによって爆発は阻まれた。

「碇シンジ君ね？」

「あ、はい！」

車から顔を出した人物は、シンジの名前を確認する。

「早く乗って！」

「は、はい！」

シンジはすぐに助手席に乗り込み、それを見て女性は車を発進させる。

「悪いわね，待たせちゃって。」

「いえ，僕の方こそ。」

シートベルトをしめながら，シンジは答える。

NERV本部

「くそ！何故だ！？全弾命中したはずだぞ！？」

男は机を叩き，座り直す。

「A・Tフィールドだな。」

「ああ。A・Tフィールドがある限り，“使徒”には攻撃できない。」

イスに座り，さして驚いた様子もなく男は答える。

そして，軍服の男は電話にIDを認識させ，電話口にこう告げる。

「ああ，計画通りに頼む。」

巨人に攻撃が通じないことが分かったVTOL達は巨人から早急に離れる。

「ウソでしょ！？N2地雷を使うって言うの！？」

そして巨人を中心に光が起こる。

「伏せて！！！！」

その瞬間、爆発は辺りを大きく飲み込んだ。

NERV本部

「はははははは！どうだ！これがN2地雷の威力だ！」

「最早、君の人形はいらないのだよ。」

「映像、モニターに出ます。」

しかし、そこには体の各部からの出血は止まり、新たな“顔”が浮

かび上がった“使徒”の姿があった。

「化け物め!!」

「街一つを無駄にしたんだぞ!」

「……。たった今より、作戦の全指揮権は君に移った。」

「勝てるのかね? 碇。」

男、碇ゲンドウはサングラスに手をあて答えた。

「そのための『NERV』です。」

「助かりましたね。」

「まったくね。レイが間に合って助かったわ。」

そこには、紫色の巨人がシンジ達の前に立ちはだかっていた。

「って、落ち着いてる場合じゃないですよ! 早く逃げなきゃ!」

「あ、大丈夫。これは味方よ。」

そして紫の巨人は黒い巨人へと突っ込んでいく。

「さつきはありがとうございました。葛城さん。」
「ミサトでいいわ。碇シンジ君。」

「・・・NERV？」

「そう、特務機関NERV。国連直属の非公開組織。」

「・・・父の仕事ですね。」

「まあね。」

「・・・、父はどんな用があつて僕を呼んだんですか？」

「・・・。」

「そうですね。何も用がないのに父が僕を呼ぶはずありませんよね。」

「苦手なのね、お父さんが。」

「ただめんどくさいだけです。それに、会っても気まずいだけですから・・・。」

しばらくすると、眼下にはピラミッド型の建物、『ジオフロント』が現れた。

「すごい！！本物のジオフロントだ！！」

「ここは私達の秘密基地，NERV本部，人類再建の要よ。」

ジオフロント内のエレベーターに乗っていると、金髪の女性が現れた。

「あら、リツコ……。」

「なにをやっているの、葛城一尉。人手もなければ時間もないのよ？」

「ゴメン！」

「彼がサードチルドレンね。」

「ええ。」

「私は技術一課，E計画責任者，赤城リツコ。よろしくね。」

「碓シンジです。よろしくお願いします。」

リツコは二人を連れて移動した。

「現状は？」

「使徒は依然侵攻中。N2地雷も表面組織を焼いただけで効果は無し。」

「見てたわよ。じゃあやはり……。」

「エヴァしかないわね。」

シンジ達はボートに乗り換え暗い通路にでた。そしてライトが当てられた先には……。

「さっきの巨大ロボット!？」

「人が生んだ，凡庸人型決戦兵器エヴァンゲリオン。その初号機。」

「・・・これも父の仕事ですか。」

「ああ、そうだ。」

声のした方を見上げると上のガラス越しから碇ゲンドウの姿がみえた。

「久し振りだな。シンジ。」
「・・・。」

「出撃。」

「何ですって!?!」
「でもパイロットは・・・。ってまさか彼を!?!」
「シンジ君。乗りなさい。」

「そのために・・・僕を呼んだんですか・・・?」
「そうだ。」

「父さんは、僕がいらないんじゃないの・・・?」
「必要だから呼んだのだ、乗れ。でなければ、帰れ!!」

シンジはその言葉に反応し、そしてミサトを見る。

「シンジ君、乗りなさい。」

「ミサトさんまで・・・。」

「何のためにココまで来たの? お父さんに認めてもらうためでしょ?」

「でも・・・無理だよ！できっこないよ！」

「シンジ君。さっき、これが動いてるのを見たでしょ？」

「・・・はい・・・。」

「さっきは“綾波レイ”という子が動かしていたの。女の子よ。」

「だったら、その子がやればいいじゃないですか。」

「でも、さっきの戦いで大けがをして戦えないの。」

「・・・。。。」

「逃げていて、いいの？」

シンジはまだ顔を上げない。

しかし、

「逃げちゃダメだ！逃げちゃダメだ！逃げちゃダメだ！！！」

「乗ります。僕がやります！」

使徒，襲来 part. 1 (後書き)

出撃するEVA初号機。

初号機はついに先陣を切る。

その戦いの先に何が待っているのか・・・。
少年・碇シンジは何も知らない・・・。

次回，使徒，襲来 part. 2

使徒，襲来 part. 2

「エヴァ初号機，射出口へ。」

「エヴァ初号機，発進準備完了。」

初号機に搭乗したシンジは，エレベーターによって移動し，エレベーターは固定される。

「構いませんね？」

「ああ，使徒を倒さぬ限り，私たちに未来はない。」

その言葉にミサトはうなづく。

「エヴァンゲリオン初号機発進！！」

直後，シンジの体に強烈なGが襲いかかる。

「くっ！」

再び大きなGを受け，初号機は地上へと出た。

「エヴァンゲリオン初号機，リフトオフ！！」

最終安全装置は解除され，初号機はついに戦闘に入る。

「シンジ君，今は歩くことだけを考えて。」

そして，初号機は一步踏み出す。

「歩いた！」

おおっ、と歓声が上がリ初号機はさらに歩く。
が、足をもつれさせ、倒れる。」

「っう！」

「シンジ君！早く、早く起きあがるのよ！！」

しかし、初号機は使徒に頭部を捕まれ、左手をつぶされる。

「左腕損傷！回路断線！」

そして、そのまま頭部に槍を打ち込まれ、ビルへと叩き付けられる。

「頭部損傷！パルスが逆流します！」

「回路遮断、せき止めて！」

「信号、受け付けません！」

「ここまでね。パイロット保護を優先、プラグを強制射出して！」
「ダメです！完全に制御不能です！！」

そして、初号機の目が再び光りを灯す。

「グオオオオオオオッ！！」

「エヴァ、再起動。」

「そんな、シンクロ率はマイナスなのに・・・まさか！？」

「暴走…。」

そして、初号機は大きく跳躍、使徒に掴みかかるが使徒は抵抗し、

一端後退する。
再び突進するが…

「A・Tフィールド!?」

「アレがある限り、使徒には接触できない・・・!」

しかし、初号機は一気にA・Tフィールドを全開、左腕を復元する。

「すごい!」

そのままA・Tフィールドに手をかけ、こじ開ける。

しかし、使徒はビームを放つ。

だが、初号機もA・Tフィールドを展開、ビームを弾き使徒の両腕を掴み、へし折る。

そこから蹴りを放ち、更にタックルで追い打ち。

倒れた使徒のコアを殴りつける。

そして、使徒は初号機に取り憑き、コアは光をあげて爆散する。

そして、血の雨の中、初号機は立っていた。

「アレが…エヴァの…。」

「本当の姿…。」

「彼が動いたようだね。」

少年は一人、空を見つめていた。

「左様。全ては死海文書の通りに進んでいる。」
「また、始まるんだね。」

「頑張って、生き残ってくれるんだろうね？」

少年の名は、渚カヲル。

使徒，襲来 part. 2（後書き）

初の戦闘を勝利で飾ったシンジ。

そんなシンジのもとに新たな使徒が襲いかかる。

そして，シンジに襲いかかるもう一つの問題…。

次回，ナイフと少年 part. 1

ナイフと少年 part. 1

「っ!!」

頬を思いきり殴られたシンジはしかめ面をして地面に尻もちをつく。

「悪く思うなや、転校生。」

「悪いね、この間のゴタゴタでアイツの妹，ケガしちゃってサ。」

鼻血をぬぐい，シンジはぼそりとつぶやく。

「僕だって，乗りたくて乗ってる訳じゃないのに…。」
「っ!!」

それは，彼・鈴原トウジの耳に届いたらしく，再びシンジは殴られた。

NERV本部

「いい？シンジ君。昨日と同じ通り，インダクションモードの練習をするわよ。」

「…はい。」

シンジは，教えられたとおりに操作する。

「目標をセンターに入れてスイッチ…。目標をセンターに入れてスイッチ…」

しかし、しばらくするとコールが鳴り響く。

「…使徒ね。」

それは、赤いイカのような形をした使徒だった。

「司令の留守中に第4の使徒襲来、か。」

「第3新東京市，戦闘態勢に移行。」

「住民の避難，完了との報告が入っています。」

「分かったわ。」

シェルター内

「ちえ。またこれか。」

相田ケンスケは怪訝な顔をして、カメラのモニタをトウジへ見せる。

「また文字だけか。」

「くうう、こんなイベント、滅多にないのに…。」

ケンスケは少し考えた素振りを見せ、トウジに耳打ちをする。

「なあ、こっそり外に出ない？」

「はあ？」

「この時を逃せばあるいは永久に！ だろ、ロック外すの手伝ってよ！」

「じゃあないな。」

二人はそつと立ち上がり入り口へ向かう。

ちなみに委員長・洞木ヒカリにはトイレと嘘をついておいた。

NERV本部

「いい？シンジ君。地上へ出ると同時に銃を発砲。A・Tフィールドの中和を忘れないで。」

「はい。」

「エヴァンゲリオン初号機，発進！！」

初号機は，使徒の待ちかまえる第3新東京市へ射出された。

「おお！これぞ苦勞のかいもあったというもの！」

相田ケンスケは，使徒の姿をビデオカメラに写し，鈴原トウジは使徒の姿に怪訝な顔をするのであった。

「待ってました！」

瞬間，エヴァ初号機がビルから現れ，使徒へ回転式多砲身440mm機関砲を乱射する。

「バカ！爆煙で敵が見えない！！」

全ての弾を打ち尽くした初号機は使徒の姿を確認するために動かない。

その時、初号機は倒れ込み、回転式多砲身440mm機関砲は真つ二つになる。

それは、使徒の触手によるものだった。

「うわあああ！」

初号機は使徒から逃げ出すが、使徒は再び触手を振り上げる。

「アンビリカルケーブル断線！」

「エヴァ内蔵電源、残り4分57秒！」

使徒は触手を初号機の足に絡ませて、吹き飛ばす。

「うわっ！」

山肌に叩き付けられ、初号機は動かない。

「シンジ君！？ダメージは？」

「問題なし、いけます。」

「…くう！」

しかし、そこには…

「シンジ君のクラスメイト!？」

「何で!？」

更に使徒は進行，初号機に触手を振り下ろす。
すかさず初号機はそれを掴む。

「内蔵電源，残り3分!!」

ナイフと少年 part. 1 (後書き)

使徒の進行，そしてクラスメイトの問題により絶体絶命の状況に追い込まれるシンジ。

内蔵電源も少ないまま戦闘を続けるシンジが下す決断は…？

次回，ナイフと少年 part. 2

ナイフと少年 part. 2

「エヴァ初号機，活動限界まであと3分!!」

「仕方がないわね! シンジ君，その2人を操縦席に!」

「え?」

「2人を回収した後，一事退却，出直すわよ。」

その瞬間，エントリープラグはエヴァから射出された。

『その2人，乗って!』

2人はすぐにエントリープラグに乗り込み，再びコンタクトを開始する。

「なんやこれ，水やないか!!」

「カ，カメラが…。」

「2人とも黙って! 気が散る!」

すると，エヴァはすぐに触手を引き，使徒を蹴り飛ばす。

『今よ! 後退して!』

「おい，転校生? 後退しろ言うとるで? 転校生!!」

「逃げちゃダメだ! 逃げちゃダメだ!」

「逃げちゃダメだ！」

初号機はプログナイフを装備し、構えた。

「初号機，プログナイフ装備！」

「え？」

『シンジ君！命令を聞きなさい，退却よ！シンジ君！！』

「うああああああああああああああ！！！」

そのまま初号機は使徒へ突っ込む。

しかし，使徒の触手により腹部を貫かれる。

「ぐっ！うああああああああああ！！！」

初号機は使徒のコアにナイフを突き立てる。

「エヴァ初号機，活動限界まで20秒！」

「うああああああああああ！！！」

[1

2

3

4

5

そして、初号機を目と使徒のコアは光を失う。

「0！エヴァ初号機，活動限界です！」

「使徒は…？」

「使徒より，熱源反応！」

「ヤバイ！」

使徒の触手が初号機に振り下ろされる。

しかし，それは一つの物体によって遮られる。

「エヴァ！？」

そこには，見たことのない漆黒のエヴァがあった。

エヴァはそのまま触手を握りつぶし，コアにナイフを突き立てる。

使徒のコアは形を失い，使徒は爆散した。

そのまま，漆黒のエヴァは霧のように消えた。

第4の使徒，殲滅。

ナイフと少年 part. 2 (後書き)

第4の使徒を殲滅した漆黒のエヴァ。

そして、命令無視をしたシンジ。

シンジは、そのことに愛想を尽かし逃亡する。

次回、さまよえるサード・チルドレン

さまよえるサード・チルドレン

「シンジ君が行方不明？」

「そうよ。3日前に命令無視をすこし叱ったらいなくなったのよ。」

僕はいらない人間なんだ。

誰からも必要とされてない。

必要とされているのは、

エヴァに乗る僕。

碇シンジは必要じゃないんだ。

『本当にそうなのかい？ 碇シンジ君。』

誰？

『僕が誰か、なんてどうでもいいことさ。』

『この世界で必要のない人なんているのかい？』

いるよ。現に今、ここに。

『いや、君は必要だよ。』

それは、エヴァに乗ってる僕だ。僕自身じゃない。

『違うね。少なくとも、僕は今、君自身が必要だよ。』

え？

『また、いずれ会おう。碇シンジ君。』

今のは、誰の声だろう………？

シンジはいつの間にか山奥へと来ていた。
理由はない。ただ足の向くままに来了。それだけだ。

シンジは後ろから付きまとう気配が鬱陶しかった。

「いいですよ、もう……。」

「ミサトさんのところに連れて行ってください！！！！」

直後、ライトが灯り、たくさんの男達が現れた。
NERV 諜報部の者達だ。

「シンジ君。3日間ほつつき歩いた気分はどう？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「シンジ君、おじさんのところに帰りなさい。」

「!？」

「中途半端な気持ちでパイロットをされても困るのよ。」

「でも、僕がいなくなっても困るんでしょ・・・。」

「…あなたに意志があるか。それだけよ。ごめんなさい。」

「このことは忘れて、以前の生活に戻って。…じゃあね。」

「ミサトさん!？」

ドアは閉まり、シンジの言葉は遮られた。

…僕にも、できることは……ある？

「手抜きはなしや！思いっきり殴れ！でないとワシの気持ち収まらん！」

「ま、こういうヤツだから、頼むよ。」

「行くよ…。」

ガツッ！

「くく！こ、これで貸し借りチャラや！…殴ってスマンかったな、碇…。」

へへへと笑い、鈴原、いやトウジは僕に笑ってくれた。

レイ、心の向こうに part. 1

綾波レイ 14歳

ファーストチルドレンにして、エヴァンゲリオン試作0号機の専属パイロット。

過去の経歴は一切不明。

「そんなレイを助けたのが…。」

「父さん…?」

「にわかには信じがたいわね。」

「正規の報告書では削除されているけど、紛れもない事実よ。」

父さんは綾波にどんな思いがあるんだろう…?

「ただいまより、エヴァンゲリオン試作0号機、第2次起動実験を

開始します。」

「初期コンタクト，問題なし。」

「続いてA10神経接続。」

「シンクロ数，安定。」

「精神汚染，問題なし。」

「エヴァ0号機，シンクロ完了。続いて起動実験βに移行します。」

しかし，そこで電話のコールが鳴る。

「碇，第5の使徒だ。」

「そうか。エヴァ初号機，出撃。」

がんばれの一言もないんだね，父さん…。

「エヴァ初号機，発進！！」

シンジは初号機と共に地上へと射出される。

「目標に高エネルギー反応!」

「何ですって!?!」

「これは……。」

「加粒子砲!?!」

初号機は地上へと出る、が。

「避けて!?!」

「え?」

使徒は正八面体から姿を変え、渦を巻き形が安定した瞬間。

コアから光が放たれ、ビルは融解。

初号機の胸部にビームを撃つ。

「ぐううううう!」

「シンクロ率、ミニマムに落として!」

「防護アーマーを展開!」

初号機の前に壁が出、ビームを弾く。

さらに使徒は形状を変え、6本の柱を作る。

五つのコアから出た光りが一つに集まり、大型の加粒子砲を発射する。

「うあああああああ!」

「エヴァ初号機、機体を強制回収して!」

「ダメです!カタパルト融解!」

「防護アーマー03を展開して!」

そして、両サイドにあったビルから更に大型の防護アーマーが展開される。

そこに使徒は新たな形状、三つの針を展開、その回転が頂点に達した時、

コアが激しく光り、更に巨大な加粒子砲を放つ。

防護アーマーも意味を成さず融解する。

「いやだ！もういやだ！出して！ここから出してよ！」

「……………爆砕ボルトに点火！機体を強制回収！」

周辺のボルトに点火され、そこら一体が抜け落ちる。
使徒は元の正八面体に戻る。

「救護処置急いで！！」

シンジはすぐに治療室に運ばれ、手当を受ける。

「状況は芳しくないわね…………。」

You are (not) alone.

「それじゃ、各班の情報を挙げて。」

「はい。目標はレンジ内にある目標を自動迎撃するシステムのようです。」

「目標のA・Tフィールドは常時変化しているためにコアの断定は難しいです。」

「N2爆雷はNERV本部を破壊できるほどの威力が必要です。」

「松代のマギ2号も同じ解答よ。」

「攻守共にパーペキ。動く要塞ってことね。」

「白旗でもあげます?」

「それもいいかもネ。」

「確か戦自研の極秘資料、諜報部にあったわよね。」

戦自研のもとには3機のVTOLが訪れていた。

「我が戦自研の『陽電子砲』を使徒迎撃に…ですか?」

「そうよ。日本全土から電力を集め、使徒に対抗する。『ヤシマ作戦』。別名『蛇の道は蛇作戦』よ!」

「はあ……。」

そう。ミサトは相手が加粒子砲ならこちらは陽電子砲で対抗しようと言うのだ。

「無茶な作戦を立てたわね、葛城作戦部長さん？」
「仕方ないでしょ。残り9時間で最も確実に成功できる作戦、これしか無いんだから。」

NERV本部 医務室

「ん……。」

「おはよう、碇君。」

「…綾，波？」

「『ヤシマ作戦』の作戦概要…。」

0号機，及び初号機パイロットは本日，19…00，エヴァに搭乗。
19…30，エヴァで目標地点に移動。以降は別名あるまで待機。
明日，00…00，『ヤシマ作戦』発令。」

「え……。」

「0号機パイロットは守りを担当，初号機パイロットは砲手を担当。」

「僕が…。」

「先，行くから。」

僕が，砲手を…。

「シンジ君，集合時間はとくに過ぎてるわよ。」

「・・・怖いんですよ。エヴァに乗ることが。ミサトさん達は
いいですよ。いつも僕だけが怖い思いをして。」

「それは違うわ。シンジ君。」

「この地下にはね、人類の始祖たる第2の使徒、リリスがいるわ。
使徒がこのL—E E Eに進入するところは自動的に自爆する仕掛
けになってるの。」

「そうだったんですか…。」

「あなただけが、怖い思いをしてる訳じゃないわよ。」

「…もう一度、乗ってみます。」

待機していたシンジはレイとがいた。

「綾波はなんでこれに乗るの？」

「絆だから。」

「父さんとの？」

「・・・みんなとの。」

「みんな？」

「エヴァに乗る以外、私には何もないから。だから、それをやめたら死んでいるのと同じ。」

「死んでるのと同じか…。」

「時間よ、行きましょ。」

「さよなら」

月がレイを悲しげに照らしていた。

「シンジ君、日本中のエネルギーあなたに預けるわ。」
「…はい。」

「『ヤシマ作戦』、スタート！陽電子狙撃砲、用意！」
「観測班、ただちに回避！」

直後、ミサイルが使徒へと降り注ぐ。
使徒は無数の針を展開、加粒子砲にてミサイルを迎撃。
発射口を狙う。

「第2砲台、被弾！」

「悟られるわよ。間髪入れないで次！」

次に砲台はバルカン砲を連射する。

使徒はすぐに形を変え、A・Tフィールドで防ぐ。

「陽電子狙撃砲、最終安全装置解除！」

「撃鉄起こせ！」

そして、マークは使徒のコアを捉える。

「発射！！」

陽電子はまっすぐに使徒を貫く。

使徒は無数のトゲを出し、血を滴らせる。
だが。

「ハズした！？」

「まさか、このタイミングで！？」

使徒は五芒星の形をつくり、初号機へ発射する。

「うわあっ！」

「シンジ君！」

加粒子砲は初号機を、捉えなかった。

「綾波！」

0号機はすかさず初号機の前に立ちはだかり、盾を構え使徒の攻撃を防いだのだ。

「陽電子砲は！？」

「チャージには時間が！」

「盾が持たない！！！」

0号機の盾がこわれ、加粒子砲は0号機と初号機を飲み込む。しかし。

「あれは！？！」

「白色のエヴァ！？！」

白色のエヴァが盾を構え、初号機と0号機を守っていた。

『サード！』

「え？」

『今だ。使徒を撃て！』

「っ！くそお！」

シンジはトリガーを思いきり引き、陽電子は使徒のコアへ吸い込まれるように飛んでいった。

今度こそ陽電子はコアを撃ち抜き、使徒は形を無くす。

『サード、ファーストのダメージが思ったより高い。早く助けてやれ。』

「待って！君は誰！？！」

しかし、その問いに声は答えずエヴァも消えた。

「っ！綾波！！」

シンジはすぐにエントリープラグを引き抜き、そばに走り寄る。

「綾波！」

「碇，君？」

「良かった…。」

「何故，泣いてるの？」

「綾波が生きてて，泣いてるんだよ。」

「ごめんなさい，こんな時どんな顔をすればいいのか，分からないの。」

「笑えば，いいと思うよ。」

レイは、一瞬驚いた顔を見せたが、ふっと微笑んだ。

瞬間、心、重ねて part. 1

「シンジ君、アスカ。旧東京市に使徒出現よ！いい？現地に着いたらアンビリカルケーブルの接続をすぐ行つて！」

「ミサト。なんで私とバカシンジなの？私1人で十分なのに。」

「戦力が多いに越したことはでしょ。ちなみに2機だけなのは0号機、4号機は修復中だから。5号機は調整が終わってないからよ。」

「聞いてませんよ。」

「五月蠅いわね！！」

などと話をしているうちに旧東京市に到着する。

「いい？私が先行するからちゃんと援護すんのよ！」

「援護？」

「レディファーストよ！」

「ったく。分かったよ。」

10分後、突如10km先の水がもりあがる。

「来た！」

第7の使徒は、水飲み鳥を思わせる巨大な外観をしていた。

初号機はすぐにライフルを構え、使徒に発射する。

A. Tフィールドを展開した使徒に2号機は突っ込み、使徒の首（？）の付け根にあるコアを斬る。

使徒はそのまま後ろに倒れた。

と、思いきや使徒は勢いよく立ち、2号機を蹴り上げた。

使徒のコアは2つに分裂し、使徒の足の付け根に移動した。

「アスカ！」

「くっ…。」

「2号機、戦闘不能！」

「くそ！」

初号機はナイフを構えて使徒に突っ込む。

「ダメよ！シンジ君、後退して。」

しかし、シンジはそれを聞かずナイフを構える。
しかし、使徒は初号機をビームで退ける。

「うわっ！」

「初号機、戦闘不能！」

NERV本部 視聴覚室

先の戦闘をビデオによって鑑賞していたNERVの面々に、しばし沈黙が流れる。

「初号機、2号機、両パイロット。」

「はい。」

「お前達の仕事はなんだ？」

「えと…。」

「使徒を倒すことです。」

「そうだ。決してこのような醜態を晒す事ではない。」

そう言ってゲンドウは行ってしまった。

「はあ…。」

「まあまあ、2人とも落ち込まないで飯でも食いにいこっか。」

「加持さん♪」

加持リョウジ。NERV主席監察官である。

「あの、ミサトさんは？」

「ああ、アイツなら今日はずっと仕事だろ。責任者は責任とるためにいるんだからな。」

「……………」

「はい、ミサト。UNからの請求書。」

「はあ、どうすりゃいいのよ。」

「次も失敗だったらクビね。」

「分かってるわよ。」

「クビがつかう方法があるんだけど？」

「おお！さっすが赤木博士！」

「考えたのは私じゃないわよ？」

と、差し出されたディスクには『マイハニーへ』と書かれている。

「加持のヤローの…。やっぱりいらない。」
「クビになってもいいのね。」

リツコはにっこりと笑っていた。

ミサト宅前。

「なんで委員長がおるんや。」
「私は式波さんと真紀波さんのプリント届けに来たんだけど。」
「ワイらはシンジとリクヤに会いにきたんやけど。」
「「「・・・・・・・・・・」」」

ぴんぽーん
とりあえずインターフォンを押す。

『はーい。ちよーっと待ってねー。』
『ちよっと！マリ開けないでよ！』

と、間々からドツタン、とかガシャーンとか聞こえてくる。

『どちら様？..』

「リクヤ。ウチや。トウジにケンスケに委員長。」

『あ、ヒカリ？ちよっと早く入ってきてよ！シンジもアスカもスツ

ゴク面白いから!!」

セリフの間々に爆笑が含まれています。

「「「?」」」

『あ!リクヤ、開けようとしなide!!』

『だって来客だし!』

『だーもう!こんなところ見せられないって!話聞いて…』

そこには、腹を抱えて笑いまくるマリとリクヤ。

そして、ペアルックのシンジとアスカだった。

瞬間、心、重ねて part. 2 (前書き)

使徒とのファースト・アタックが失敗したシンジとアスカ。

その2人を見舞いに来たトウジ・ケンスケ・ヒカリが見たのは

ペアルック姿のシンジとアスカだった。

瞬間、心、重ねて part. 2

「なーんだ、使徒を倒すためだったんですね。」

「あー、まったく何をしとるんかとびっくりしてもうたわ。」

「で、ユニゾンの方はどうなってるんですか？」

「見ての通りよ。」

「」「はあ……。」「」

4人が肩を落とすのも無理はない。

何故ならまったく言っていないほどユニゾンができていないからだ。

「大体、何で私とバカシングが組むことになってんの！？こんなヤツに合わせるなんてできっこないわよ！！」

「だからユニゾンするんでしょ？」

「とにかくこんなヤツとユニゾンなんてできないわ！！」

「しょうがないわね。レイ、やってみて。」

「はい。」

レイは静かに立ち上がり、シングの横に立つと音楽に合わせてシンジとまったく同じ動きをはじめ。

「0号機が修理中じゃなかったらレイを出すわね。」

「……………だったら、ファーストが2号機に乗って出ればいいじゃない。」

そう言って、アスカは言ってしまった。

「泣かせた。」

「泣かせたな。」

「泣かせた。」

「泣かせたわね。」

「あゝ、闘争心煽ろうと思ったのに……。」

するとヒカリはいきなり立ち上がり。

「何やってるのよ、碇君!! 女の子泣かせたんだから追っかけなさい!!!」

「アスカ。」

「何よ。」

「あのさ……。」

「つまらないことだったら殴るわよ。」

「……自分のことあんまり特別と思わない方がいいよ。」

「……」

「確かにキミは僕より何でもできる。でも、それだけじゃ……。」

「私に指図するって言うの!? バカシンジのくせに! バカのくせに
!!!!」

「…………ゴメン。先に戻ってる。」

「……………」

葛城邸

1時間後、アスカは戻ってきた。

「シンジ。これからみっちり練習するわ! 碇司令をあつと言わせる
の!」

「アスカ…………。」

こうして、シンジとアスカのユニゾンは平日までも続いた。

「使徒，まもなく作戦領域に到達。」

「敵A・Tフィールド，依然健在。」

「初号機及び2号機，S型装備とのシンクロ完了。」

「第3新東京市，稼働率48%」

「2人共，準備はいい？」

「もちろんよ，ミサト。」

アスカはモニター越しにVサインをする。

「いいシンジ？出撃と同時にA・Tフィールド全開，最大全速でいくわよ。」

「分かってるよ。内部電源の切れる62秒までにケリをつける。」

ミサトは2人に頷きかけ，合図を送る。

「外部電源，パージ！発進！！」

号令と共に2機は射出された。

2機はすぐに持っていたライフルを乱射。しかし、使徒のA・Tフィールドは健在。

使徒は無数の針を2機に発射。

後退しながら避け、ライフルを乱射する。

ミサイルが飛び、使徒に直撃する。

2機はそのまま使徒のコアにパンチ、膝蹴りを食らわす。

上空に旋回し、使徒のコアに跳び蹴りを食らわす。

「これで終わりだあああああ!!!!!!」

そのままナイフを取り出し、使徒のコアに突き立てる。

コアは形を無くし、爆散。続けて使徒も爆散する。

「やったね，アスカ。」

「まあね。鈍くさいあんたの割にはがんばったわね。」

「キミの口からお褒めの言葉が聞けるなんて思いもしなかったよ。」

第7の使徒，殲滅。

父

月面基地 タブハベース。

「アレが例の6号機，Mark. 6か。」

「しかし，ゼーレは何を考えている。着陸の許可を下ろさんとは・・・。」

「老人は恐れているんだよ。我々が真実に近づくことを。」

月面。

「ふふ，そろそろ第8使徒が出現する頃だね。」

「左様。」

「バックアップはあるのかい？」

「もちろんだ。計画は進んでいる。」

「E計画，人類補完計画，そして・・・。」

「人造使徒計画，か。」

「そろそろ，地球への帰還の時間だな。」

「本部より入電。NERN本部直上に使徒出現。」
「第8の使徒，か。」

謎の人物

中学校 屋上

シンジはただ、ぼーっと空を眺めていた。
流れる雲をただ、無心に。

(父さん、僕のことを認めてくれたのかな…)
「どいてどいて〜〜!!!!」
「…え？」

ふと声の方を見るとこちらへ突っ込んでくるパラシュートのすがたが見えた。

「っうあ!!」
「わきゃあ!!」

そのまま少女はシンジへと突っ込み、ようやく停止する。

「いたた……」
「んー!んー!」
「っわ!?ゴ、ゴメン!」

シンジのものがきに少女はようやく身を起こす。
ようやく呼吸ができるようになり、しばらく息を荒くしたシンジの呼吸も整ってきた。

「ふう。ねえキミは？」
「え? ああ、私はね…」

その時、彼女の携帯が鳴り、少女は「ちょっと待って」といい、携帯に出る。

何語かはシンジには理解できず、ただ待っていた。

『だーから、そのことについてはそっちに一任するって言ってるでしょ?』

『

『そうそう。え? ああ、例の少年に接触したわよ』

『

『はいはい。できるだけ接触は避けるわ。あとは例の日までジッとしてるわよ。そっちもそっちでお願いね』

『

『分かったわよ。じゃあね』

「というわけだから。じゃあね、NERVのワンコ君?」

少女は落ちていたシンジのS-DATを拾い、シンジに渡した。

「え? あ、うん……」

奇跡の価値は part. 1

「NERV本部直上に使徒を確認。」

「なんなの、これ。」

使徒の姿は確認できず、何か白い物体、いや光りがあるだけだった。

「これが、使徒？」

「ええ。強力なA.Tフィールドが確認されています。光りを通さないほどこに。」

「新型N2爆雷も効果ありません。」

「この使徒は今までの使徒と同じく自爆するつもりね。NERV本部を巻き込んで。」

「分かってるわ。こうなったら最後の手段ね。」

NERV本部 作戦室

「使徒を直接、ですか？」

集められたシンジ、レイ、アスカ、マリ、リクヤの5人は作戦概要を伝えられていた。

落下してくる使徒を直に支える、これが作戦だった。

「もし、失敗したらどうなるの？」

「その時は本部をえぐられるわ。ここら一体もね。みんな、心してかかるように。」

第3新東京市を囲むようにして配置されたエヴァ5機。

「2号機の内部電源、充電完了。」

「0号機の内部電源、充電完了。」

「4号機の内部電源、充電完了。」

「5号機の内部電源，充電完了。」

「初号機の内部電源，充電完了。」

「エヴァ全機，オールグリーン。」

「みんな，位置について。現場では各自の判断に任せます。」

それを合図にエヴァは全機スタートの体制をとる。

「行くよ，みんな。」

「スタート!!」

エヴァは全機，走り出す。

初号機は山を大きく跳躍して飛び越える。

0号機と2号機は電線を飛び越え，

4号機は森の上を駆け抜け，

5号機は傾斜を下る。

「目標のA・Tフィールド、変質！軌道が変わります！」
「予想地点、修正20！」

「何よ！計算より速いじゃない！？ダメ、私じゃ間に合わない！！」
「こっちで何とかするよ！ミサトさん！！」

「緊急コース形成！605から607！」

せり出した壁を初号機は駆け抜けていき、徐々に軌道を修正する。

「次！1072から1078まで、スタンドアップ！！」

ビル群がせり上がり、その上を跳躍して飛び次いでいく。

着地と同時に走り、初号機は疾風の如く駆け抜ける。

使徒の姿が変化し、花卉のように開く。

敵の直下に位置する初号機はすかさず構える。

「A・Tフィールド、全開！！！」

初号機は使徒を受け止めるが、人のような姿の物体が初号機の腕を掴み、腕は槍に変化し、初号機の手を貫く。

「ぐああああああっ！！」

「「シンジ!!!」」

緊急で駆けつけたマリとリクヤも加わるが、それでも支えきるのは難しい。

「シンジ!!!」

「2号機!」

「分かってるわよ! 私に命令しないで!!!」

2号機はすぐにナイフを取り出し、A・Tフィールドを叩き斬る。そして、すぐにコアを狙う。

「ハズした!?!」

「いや!」

「ハズした訳じゃない! コアが動いてる!!!」

「あと30秒!!!」

「アスカ! 早く!!!」

「分かってるわよ!!!」

コアを目で追うが姿は捉えられない。

そこに0号機が使徒のコアを掴み、動きを止めるがA・Tフィールドは0号機を押し返す。

そこに4号機と5号機はA・Tフィールドをこじ開ける。

「アスカ!」

「分かってるっつーの!」

2号機はコアにナイフを2本刺す。

「もう一丁おおおお!!」

更に膝蹴りを入れ、ナイフを深く刺す。

使徒はそのまま、爆散した。

第8の使徒，殲滅。

7人目の適格者 part. 1

「第2支部が消滅！？たしかに消滅したんだな？」

『はい、全て“消滅”です』

冬月は電話越しの相手に何度も聞き返し、電話を切った。

「まさか、アメリカ支部が消滅するとはな…」

「原因は？」

「不明、だそうだ」

「そうか」

「3号機は近々こちらで引き取ることになる。いいのか？」

「構わない」

月面基地 タブハベース

「もうあんな仕事はゴメンだよ。キール議長」

「よかろう。あそこさえ陥落すれば3号機は無事日本へと運搬されることは間違いないからな」

「いくらMark. 6の起動実験だからと言ってやりすぎじゃないかい？」

「いいのだよ、アレで」

NERV 作戦室

「まさか、第2支部がなくなるなんてねえ」

ミサトはモニタを見つめている。

「制止映像のみですが、確かに消滅ですね」

「確か、あそこってS2機関の実験してたんでしょ？」

「そうね、今回は恐らく研究していたS2機関の暴発、ってところかしらね」

「せっかくのS2機関もパーね」

「そうね。近々こちらに3号機が来るらしいから、委員会にセヴンスチルドレンの選抜をしなきゃ」

「“ダミー”とやらは、使わないの？」

「まだ、問題が多数あるわね。使えないわ」

「ふーん、それにしても3号機って4号機の兄弟機でしょ。だったら何でリクヤは3号機じゃなくて、4号機のパイロットなの？」
「そこまでは、私も知らされてないわ」
「あっそう」

中学校

「鈴原。鈴原トウジ、至急校長室まで来なさい」
「？」

いつものように教室で馬鹿をやっていたトウジに呼び出しがかかる。

「ちょっと鈴原、なんかしたの？」

ヒカリがトウジに聞くが、トウジは否定する。

「んや、心当たりはないわ。ま、ちよっくら行ってくる」

NERV本部

「これが“ダミー”とやらか…」

「ああ。EUから厳封されて送られてきた」

「使う気か？」

「ふん、とりあえずは初号機に搭載して様子を見る」

「そうか…」

中学校前

「なあ、シンジ」

「何？ケンスケ」

「3号機、こっちに来るんだろ？アメリカで建造中だったヤツ」

「3号機？」

「ああ、3号機か。懐かしいな」

「リクヤは知ってるんだ？」

「ああ、アメリカでしばらく一緒だったからな」

「3号機ってどんな感じだったんだ！？」

「そうだな。俺の4号機とカラーリングが違うだけで特に変わんなかったな」

「いいなー！なあなあ！それって俺にパイロットやらせて貰えないかな？」

「ど、どうかな…？」

「さあな…。NERVもできるだけエヴァとシンクロ率の高いヤツ
選びたいだろうしケンスケがそれに候補に挙がってれば乗れるかも
だけどな…」

「ああー！ミサトさん、俺にやらせてくれないかなー！！」
そう言ってケンスケは手を拝むように組んで天を仰ぎ見る。

と、しばらく話しているとトウジが呼び出しから戻ってくる。

「あ、トウジ。何だった？」

「…スマン。ワイ帰るわ」

「え？」

そう言っただけでトウジは鞆を取ると戸に手をかける。

「ワイこれから2、3日学校休むけど気にせんといてな」
それだけ言うと言ってしまった。

「変なヤツ…」

「何だったんだろ…」

太平洋上空

『ネオパン400より入電。前方に積乱雲を確認』

『了解。航路変更なし。直進せよ』
『了解』

3号機を輸送する航空機はそのまま積乱雲へ消えた。

NERV本部

ミサト、リツコ、マヤ、マコト、シゲルの5人は本日の定期会議を開いていた。

「『Seek』って知ってる？」

リツコが一つ話を始める。

「『Seek』って何？」

「そうね。チルドレン選抜機関委員会の中でも特別な組織。ゼーレとも接触することができると特殊機関なの。詳細は知らないけどね」

「アテがなさ過ぎるわね」

ミサトは苦い顔をして手元の書類に目を落とす。

「最近発足した組織ですから情報がないのは当たり前ですけどね」

「ですがそこではEVAの研究をしているそうですよ」

「ますます怪しいわね」

（Seek……。詳しく調べる必要がありそうね）

その後、被害報告を行い定期会議は解散した。

松代 エヴァンゲリオン3号機起動実験場

現在エヴァ3号機が到着し、様々な微調整が行われている最中である。

その中にはミサトの姿もあった。

「で？セヴンス・チルドレンはまだ来ないの？」

「いえ。5分後に到着の予定ですが……。本当にいいんでしょうか？こんな所で起動実験なんて」

「ここらは民家もないから大丈夫よ。それに0号機も護衛についてるんだし」

ミサトが書類を確認しているとリツコが到着した。

「遅いわよ、リツコ」

「それは悪いことをしたわ」

「セヴンス・チルドレンも到着した模様です」

3号機は起動準備に入った。

『鈴原君，気分はどう？』

「ハイ。特に異常はありません」

『そう。あまり緊張しないでリラックス，リラックスウ』

「ありがとうございます」

トウジは目を閉じ，心を集中させる。

バシャン。

不意に水の落ちるような音。
前を見ると青い液体がこちらに近づいてくる。

「な!?!」

アラート音が響く。

「パイロット、危険域に突入!」

「なぜ急に!?!」

「せき止めて!このままじゃパイロットが人でなくなってしまう!」
リツコの指示により電源が落とされる。

しかし、3号機は活動を停止しない。

プラグの周辺から異常な反応が発生する。

「まさか!?!」

「使徒!?!」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!?!?!?!?!」

3号機が咆吼を上げた瞬間、起動実験場が爆発を起こす。

シンジの元にメールが届く。

「松代で事故……!?!?」

臨時防衛戦

待機している初号機，2号機，4号機，5号機はそれぞれ発進準備を行っていた。

「松代で事故なんて……」

「何かあったのは確かね」

「……」

「綾波，大丈夫かな？ミサトさんもリツコさんも」

第一種戦闘態勢が展開された現場はいつもとは違う雰囲気の流れていた。

と，そのときレーダーが一つの影を捉えた。

「あ，アレは……」

「3号機……?」

「そんな……」

「使徒に乗っ取られたって言うの?」

『目標、2号機迎撃地点へ移行中』

3号機は2号機が隠れている山を越えて通過しようとする。

「ここからなら……」

2号機はバズーカを構える。

しかし、

「――ッ!! きゃっ!!!!」

「アスカ!？」

アスカからの返事は帰ってこない。

「ッ!! アスカ!!」

『2号機、中破!! パイロット負傷!!』

「いつの間に!!」

3号機はそのまま5号機迎撃ポイントへと差し掛かる。

中距離戦闘用に換装した5号機はバレットライフルを構える。

「マリ…? パイロットは?」

「ここからじゃ確認できないわよ…」

5号機が標準を合わせていると3号機は勢いよく飛び上がり、5号機を背後から押さえつける。

「ッ!!」

5号機は首を絞められて、何とか3号機を引きはがそうともがくが3号機は使徒のせいで力が増幅されているため振りほどけない。しかし、4号機が3号機にタックルし、5号機から引きはがす。

「大丈夫か? マリ」

「ダメ。電源系統がやられたみたい」

ほどなくして5号機の電源が落ちる。

（シンジは動けてないし、俺がやるしかないか……）

4号機はプログナイフを取り出し、構える。

3号機はいきなり振り向くと左腕を鞭のように伸ばし、4号機の首を掴む。

「うぐっ!!」

3号機は更にもう一方の腕を伸ばし、両腕で首を絞める。

「ぐあ……!!」

4号機は抵抗するが使徒の怪力によって振りほどくことができない。やがて、4号機はだらりと腕をたらし、動かなくなる。

「パイロット、意識不明!」

「4号機、戦闘不能!」

「シンジ、残っているのはお前だけだ。お前がたおせ」

シンジは一度、操縦桿を握るが力が入らず握ることができない。

「だって……人が乗ってるんだろ? 父さん……」

「構わん。それは使徒だ。我々の敵だ」

「でも……」

3号機は飛び上がり、初号機を蹴り飛ばす。

「うあ!!」

初号機は起きあがり、体勢を立て直すが3号機の腕によって首を捕まれ山へと叩き付けられる。

初号機は抵抗し、腕を引き離すがウェポンラックを破壊し出てきた新たな腕によって首を絞められる。

「ううう……」

「仕方がない。神経接続を全面カット、回路をダミーへ切り替えろ」
「え!? ですが、ダミーはまだ問題も多く、赤木博士の指示もなく……」

「今のパイロットよりは役に立つ。やれ」

「っ……。はい」

神経接続が解除され、呼吸ができるようになったシンジは操縦席の後方から現れた機械に腕を固定され、動けなくなる。

「な、何だよこれ!？」

プラグ内に数々の情報が流れる。

「っ! 何してるんだ、父さん!!」

「全システム、ダミー回路へ接続完了」

「システム開放、攻撃開始!!」

『グオオオオ！』

初号機は3号機の腕を振り払い、3号機の首を絞める。

ゴキリ

3号機の首をへし折り、地面へ叩き付ける。

頭部を潰し、左腕を引き千切る。

内臓を食い荒らし、次々と3号機をバラバラにしていく。

「なんで勝手に動いてるんだよ!! やめろよ、父さん!!!!」

$$\left[\begin{array}{c} \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \end{array} \right]$$

「クソッ！止まれ！止まれ！！止まれ！！！」

「止まれ、止まれ、止まれ、止まれ、止まれ、止まれえっ！……！！」

初号機はプラグを口にくわえる。

「な、やめろお!!!」

グシヤツ

「やめろ おおおおおおおおお!!!!!!!!!!!!!!」

松代 元3号機起動実験場

「いたぞ、生存者だ！！」

サイレンの音にミサトはゆつくりと目を開ける。

「大丈夫か、葛城」

「加持……。リツコは？」

「キミよりは軽傷だ。安心しろ」

ミサトは少し笑みを浮かべるがはたと気付く。

「3号機は？」

「使徒として処理されたそうだ。初号機に」

「シンジ君！？どうしよう、私、シンジ君に何も言っていない……」

3号機 迎撃地点

初号機のプラグ内に通信が入る。

「シンジ君……」

「ミサトさん……」

「シンジ君、大丈夫……？」

「ミサトさん、僕……僕……」

「シンジ君、ごめんなさい……。私、シンジ君に言っていないことがあるの……。3号機に乗ってるのは……」

3号機のプラグから人が降ろされる。

『3号機パイロット、確認』

『頭部裂傷、右足切断』

『3号機パイロット、鈴原トウジ、心音・脈拍……』

『共にありません』

『死亡確認』

「シンジ君……」

「うあああああああああああああああああああああ
あああああ！！！！！！」

7人目の適格者 part. 1 (後書き)

久しぶりに更新しました。

ストックしてたので今日はいっぱい更新しますー

青の空、灰のココロ

ジオフロント

初号機は本部施設の上にたたずんでいた。

「プラグ排出コード、認識しません」

「プラグ側からロックされています」

「シンジ君、自分が何をやっているかよく考えてみろ！」

シンジは操縦桿を握り、本部施設を蹴る。

「そんなこと言って、これ以上、僕を怒らせないでよ。初号機に残されているあと4分49秒、これだけあれば本部の半分は壊せるよ」

「今の彼ならやりかねませんね」

シンジの行動にマヤは立ち上がり、説得する。

「シンジ君、司令の判断がなければあなたが死んでいたかもしれないのよ！」

「そんなの関係ないよ……」

「だが、それも事実だ」

「そんなの関係ないって言ってるでしょ……！！！！」

シンジは叫び、本部施設を更に破壊しようとする。

「父さんは、アイツはトウジを殺したんだ……僕の手で……！！」

「……」

「何で！何でなんだよ……！！」

本部に衝撃が走る。

「父さんは何も分かってないんだ！父さんは僕の気持ちに分からないんだ……父さんも大切な人を失えばいいんだ……！そうしたら分かるよ……！！！！」

「LCL圧縮濃度を限界まで上げろ」

「……はい」

その途端、初号機の電源が落ちる。

「まだ直轄回路が残って……ぐっ！」

シンジは息苦しさを感じ、意識を失う。

病室前

軽傷だったレイ、マリ、リクヤは2人の回復を待っていた。

「大丈夫かしら、碇君にセカンド……」

「アスカの方は結構重いケガだったらしいわね……」

「……」

リクヤは黙って拳を握る。

「仕方がなかったわよ。私達もまさか鈴原君が乗っているなんて分からなかったもの」

「でも……」

病室

「……」

シンジは意識を取りもどし、一つ深呼吸をする。

「気がついたかい？」

近くでする声に一瞬びくりと身体を震わせるが、声の主を確かめて表情をくもらせる。

「加持さん……」

「大変だったね」

「……」

「碇司令がお呼びだ。回復次第、すぐに来るようにと」

「……はい」

司令室

仕事をしていたゲンドウはシンジの来訪にPCから顔を上げる。

「来たか、シンジ」

「……」

「さて、命令違反、エヴァの私的占有、それによる本部の一部倒壊。これらは全て犯罪行為だ」

「……」

「なにか言いたいことはあるか？」

「僕はもう、エヴァには乗りたくありません」

「そうか」

「父さんの顔も見たくない」

「ならば出て行け」

「はい」

シンジは踵を歸し、扉へと向かう

「シンジ、大人になれ」

「僕には何が大人かわかりません」

自動ドアは閉まり、シンジの姿が見えなくなる。

「良かったのですか？司令」

「構わん。サードチルドレンは抹消。初号機にはダミーをバックアップに回せ」

ミサト宅

シンジは荷物をまとめ、ミサトの家を出ようとする。

「シンジ君……」

ミサトは気まずそうにシンジに声をかける。

「ごめんなさい……。何も言わなかったことは謝るわ」

「ミサトさん。ミサトさんの夢ってなんですか？」

「ミサトさんは使徒の殲滅が仕事なんでしょう？」

ミサトは少し俯くと意を決したように顔を上げ話し出す。

「ええ。私の父はセカンドインパクトの時に命を落としたの。だから私は復讐したかったのかもしれないわ。父の敵を」

「ミサトさん、人の命は同じです。なのにミサトさんは人の命を踏み台にして人類を救おうとしてるんでしょ」

「……そうなるわね」

「そんなことじゃ、一生何も変わりませんよ」

シンジは立ち止まることなく去っていく。

階段の前に差し掛かり、一人の人物の姿に立ち止まる。

「リクヤ……」

「シンジ……、やめるんだってな、NERVを」

シンジは微かに、だが決意を固めた表情でうなづく。

「リクヤは、どうするの……？」

「……俺は残るよ。他にやることもないしな」

「トウジを殺したんだよ。父さんは」

リクヤは難しい顔をする。

「ああ。俺も信じることはできない、それでも……」

「……そっか。リクヤはリクヤのしたいことをすればいいよ」

「……そうだな」

「うん。じゃあね……」

シンジはリクヤの前を通り過ぎると振り向かず去っていった。

駅

シンジは空を見上げる。

「トウジ……、ゴメン……」

シンジの頬を一筋の涙が流れる。

（空はこんなに青いのに、僕の心は灰色だ……）

やがてモノレールが来て、シンジはそれに乗り込む。

月面

しばらく月面を散歩していた少年は地球を見つめ、フツと笑みをこぼした。

「そろそろだね。彼は僕の助けになってくれるのかな」

裁きの『力』

シンジが乗っているモノレールにアラート音が鳴り響く。

『現在，第三新東京市に非常事態宣言が発令されました。よってこの列車は最寄りの駅へ停車致します……』

「使徒だ……」

NERV本部

「目標は強羅防衛戦を突破」

「まもなく第三新東京市上空へ到達します」

それらの攻撃をもとめせず第10の使徒は侵攻する。

「『最強の拒絶』タイプか。予想以上だな」

ミサトが慌てて司令室に入ってくる。

「エヴァの地上迎撃は間に合わないわ。5号機をジオフロントに配置して！！0号機は？」

「左腕を応急処置中。辛うじて出せます」

「急いで。初号機は？」

「ダミープラグで起動準備中よ」

「そう。困ったわね」

「どうしたの？」

ミサトの困惑の表情にリツコが声をかける。

「リクヤがいないのよ」

「金代君が？」

「ええ。4号機は出せないわね」

「アスカも前回の戦闘でケガをして出撃できないもの、きついわね」

第10の使徒はビームを次々と第三新東京市へ発射する。

大きく地響きがして全ての装甲が一瞬にして突破される。

「スゴイ……。24の装甲を一瞬で……」

使徒は体を帯状にしてジオフロントに侵入する。

「使徒，ジオフロントに侵入！！」

「マリ，頼んだわよ……」

ジオフロント

爆発により，天井都市が崩れ始める。

「結構早いな……」

5号機の試験腕パーツを軽く動かし，感触を確かめるマリ。

やがてそれに馴染むとライフルを構える。

「第5次防衛戦を早くも突破か。速攻で片付けないと本部がパアじやん！！」

そして使徒が天井都市から姿を現す。

その瞬間，使徒に向けて2丁のライフルを連射する。

「くううう……！！」

しかし，それらはA・Tフィールドによって阻まれる。

「ダメか……」

5号機はライフルを放り投げ，試験5号機予備近接戦闘武器『フレグランス』を構える。

「これで行くかニャ……！！」

5号機はホイール全開で突っ込み，大きく跳躍。使徒にランスを突き立てる。

それすら阻まれるが，素早くウェポンラックから『ペンシルロック』を発射する。

「ゼロ距離ならば!!」

それもギリギリで受け止められ、使徒は咆吼で衝撃波を発生させ5号機を吹き飛ばす。

「イテテ……。つやバ！」

使徒の攻撃を避けるため、5号機は大きく後ろに跳躍する。無理に避けたためにバランスを崩し、一回転し着地する。

「やっぱ、一筋縄じゃ行かないか」

マリは立ち上がり、深く息を吸った。

「しゃーない。いっちゃやってみるか」

眼鏡をクイと持ち上げ、再び息を吸う。

「ヒトを捨てたエヴァの力、見せてもらうわ」

『モード反転、裏コード…ザ・ビースト』

マリがそう叫ぶとプラグ内の照明が暗転する。

「スゴイ……。これが半暴走促進プログラム……、意識を保ってるだけで結構キツイな……」

5号機は地面に手をつき、6本足の姿へ変わる。口が裂け、大きく咆吼を上げる。

『グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!……!!……!!』

そして使徒に向かって跳躍、しかし使徒には届かずA・Tフィールドにぶつかる。

「こんのおっ!!」

拳でA・Tフィールドをたたき割る。

しかし、使徒は帯状になった身体の一部を5号機の右肩と左脇腹に突き立て、右肩を切断する。

「ぐうっ……。このおおお!!」

マリは怒りにまかせて突進する。

「ダメよ、マリ!!」

その瞬間、右目とその周辺が吹き飛ぶ。
そのまま5号機は倒れる。

「そんな……」

「エヴァの半暴走促進プログラム……、これを使っても勝てない」
その時、0号機が出撃する。

「レイ……?」

「ライフルも持たずに!?!」

0号機は新型N2爆雷を持って突進する。

「レイ!!」

「A: Tフィールド、全開!!」

しかし、0号機単機ではA: Tフィールドは突破できず、押し戻される。

「くう……」

『ガオオ!!』

5号機はA: Tフィールドを食い破り、0号機を援護する。

「最後の仕事よ……5号機……」

そして5号機は最後の一つを突破する。

N2爆雷を使徒に突き立てた0号機は5号機を後ろへ投げ飛ばす。

「ありがとう。……真紀波さん」

「っ!!」

そしてN2爆雷は0号機を巻き込んで爆発する。

爆煙の中にはボロボロの0号機、そして

まったく無傷の使徒だった。

使徒は、0号機を一気に飲み込んだ。

You can(not) Advance.

「そんな……」

「おかしいです……。目標の識別信号が0号機に切り替わっています！」

「しまった！！こうなったらヤツがドグマに侵入しても爆破しない！！」

使徒はジオフロントにビームを放ち、侵入を謀る。

「冬月……少し頼む」

「ああ」

ゲンドウは立ち上がり、司令塔を立ち去る。

非常シエルター

『当シエルターは危険区域に指定されました。ただちに避難を……』
するとシエルターに轟音が響き、5号機が突っ込んでくる。

「うわっ……！！」

『イテテテ……。死んじゃうところだったニヤ』

ケガをした所を押さえ、よろよろと立ち上がるマリ。ふと目を開き、シンジが視界に入る。

『あれ？シンジ？なんでこんな所にいの？』

「……僕は、もう乗らないって決めたから……」

俯いてそう答えるシンジをしばらく見ていたが、嘆息し5号機を動かす。

『ここにいたら死んじゃうよ。逃げるの手伝うよ』

そう言って5号機の手でシンジを掴み、シエルターの外に出す。

一瞬、肌に刺すような痛みを感じたシンジはゆっくりと目を開ける。

「あっ……」

シンジは、焼け野原になったジオフロントをゆっくりと見回した。そして、0号機のメットの部分が転がっているのを発見した。

そして近くには身体を女体のように変化させる使徒の姿があった。

「なんで……」

『0号機を捕食して能力を変化させてる……。マズイよ……』

「ッ!!」

シンジはギリリと奥歯をかみしめ、走り出す。

『行っちゃったか……』

そしてそれを見送ると同時に5号機の電源が落ち、マリも意識を失う。

メインシャフト内部

装甲板を破壊し、使徒はどんどんドグマへと侵攻する。

「このままじゃ全滅だわ!! 非戦闘員退避!!」

ミサトが警告を出し、退避命令が出される。

初号機ケイジ

初号機をダミープラグにて起動準備をしている。

しかし、初号機はダミープラグを拒絶し起動しない。

『ダメです!! 起動しません!!』

「構わん。308からやり直せ!!」

ゲンドウは小さく舌打ちをし、初号機に向かって話しかける。

（なぜ私を拒絶する……ユイ!!）

その時、

「乗せてください!!!」

ケイジ内に響く声。

「シンジか。何をしに来た」

息を切らしたシンジはしばらく呼吸を整えてもう一度叫ぶ。

「僕を、初号機に乗せてください!!!」

「……。ダメだ」

「ッ! どうして!？」

「お前はすでにNERVの人間ではない。お前にエヴァに乗る権利はない」

シンジは口をつぐむ。

しかし、拳を握り叫ぶ。

「父さん! 僕はエヴァンゲリオン初号機のパイロット!! 碇シンジです!!!」

「……」

「母さんと、戦わせてください!!!」

「ッ!？」

司令塔

アラート音が鳴り響く中、使徒は巨大モニターを突き破り司令塔へ侵入する。

使徒はビームを放とうとする。

直後、壁が破壊され、初号機が使徒に殴りかかる。

「エヴァ初号機!!!」

「シンジ君!」

初号機は使徒を押し出し、隣の第19ケイジに押し倒す。左手を振り上げるが使徒がビームで左腕を吹っ飛ばす。

壁に叩き付けられた左腕から飛び散った血でゲンドウの半身が濡らされる。

「うおおおおお!!!」

そして、使徒を出撃エレベーターに叩き付ける。

「ミサトさぁん!!」

「射出いそいで!!」

ミサトの合図に最大出力でエレベーターが発射される。
ジオフロントに射出され、使徒を地面に叩き付ける。

「おおおおおおおお!!!!」

馬乗りになり、使徒のコアを殴りつける。

そして、プラグ内の照明が落ちる。

「……エネルギーが切れた!」

使徒は腕を帯状に戻し、初号機の腹部と口部を貫く。

そこからメイン施設に叩き付けられる。

ミサト達もちょうどジオフロントに上がってきて、その状況を目の当たりにする。

「シンジ君!」

「あやなみを……」

「かえせえっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

シンジの叫びに呼応して初号機は再起動する。

「動いてる……。活動限界なのに……」

『グオオッ!!』

使徒は触手を初号機に向けて発射する。

しかし、初号機はA・Tフィールドを展開し、それらを阻む。

使徒は触手を使って自身をたぐり寄せ、A・Tフィールドの直前でビームを放つ。

ゼロ距離で放たれたビームを相殺し、吹き飛んだ左腕をA・Tフィールドで補い、使徒を吹き飛ばす。

吹き飛んだ使徒にさらに追い打ちをかけるようにビームを放つ。

「スゴイ……」

「これは……ダメです、プラグ限界深度オーバー!これ以上は危険です!!」

「やめなさい、シンジ君!!ヒトに戻れなくなるっ!!」

けれど初号機は進行をやめない。

「ぼくがどうなったっていい!せかいがどうなったっていい!

でも、あやなみは……あやなみだけは……!!ぜったいたすけるっ!!!!」

初号機はトドメとばかりにビームを放ち、コアを守る防壁を破壊する。

「行きなさい、シンジ君!」

「ミサト!?!」

「誰かのためじゃない!あなた自身の願いのために!!」

ボロボロになった使徒の頭部を潰し、コアに腕を突き立てる。

「あやなみっ!!どこだ、あやなみい!!」

『いいの……』

「あやなみ!？」

『わたしはこのなかでしかいきられないから……』

『わたしがしんでもかわりはいるもの』

「ちがう! あやなみはあやなみしかない! だから、いま、たすけるっ!!!」

I need you.

初号機に現れていたエンジェル・ハイロウが赤く広がり、使徒と共に浮上する。

「うおおおおおおお!!」

初号機はもう片方の腕をコアに突き立てる。

コアが大きくへこみ、更に両手を深くに突き立てる。

「くうう!!」

シンジは四つん這いで移動し、0号機のコアを目指す。

「あやなみい!!」

『グオオオオオ!!』

初号機は低く唸り、A.Tフィールドを完全に中和する。

『……』

「……い」

「…ない」

「あやなみい!!!!!!!!!!」

『あ……』

使徒の外側から必死になってレイを目指すシンジの姿があった。

「くうっ!!」

黒い海の中に腕と顔を突っ込み、手を伸ばす。

「あやなみいっ!手を……ぐあっ!!」

使徒の強力なA・Tフィールドのせいでシンジの皮膚が剥がれていく幻痛を感じる。

「っ!!こい!!!!!!!!!!」

『あ……』

ゆっくりと手を伸ばし、シンジはその腕を勢いよく引っ張る。

「うおおおおおおおおお!!」

そして、初号機は0号機のコアを使徒のコアから引っ張り出す。

使徒は液体状に溶け、爆散する。

液体はやがてレイの姿を形作る。

姿を現した加持は初号機を見つめていた。

「全てのエヴァが揃う前に初号機をトリガーとするとは……。『ゼーレ』が黙っちゃいませんよ」

本部より脱出したゲンドウと冬月も初号機を見ていた。

「やはり、あの2人で初号機の覚醒はなったな」

「ああ、我々の計画まであと少しだ」

意識を取りもどしたマリはプラグから脱出し、異変を起こしている初号機を見る。

「ん……、なるほど。都合のいいヤツね」

「初号機の覚醒，か。早くしないとマズイなあ……」
少女は踵をかえし，歩き出す。

光へ消えるシンジとレイはとても柔らかな笑みを浮かべていた。

「あやなみ……。とうさんのこと，ありがとう」

「なにも，できなかった……」

「いいんだ，もう」

「これでいいんだ」

第三新東京市の地が十字型に裂け，初号機が姿を現す。

「初号機がこの世の全てを変えようとしている……」

「なんですって？」

「純粹にヒトの願いを叶える神に近い存在に。神を創造する代償と

して古の生命は滅びるのよ」

初号機は、大きな翼を展開させていた。

「翼……。15年前と同じ……」

「そう、セカンド・インパクトの続き、サード・インパクトが始まる」

翼がほしい

この世の全てを包み込み

抱擁する

温もりを感じることができる

暖かな翼が

僕にとっての翼は母さんでした

僕を優しく包んでくれる

でも、母さんはいない

僕の翼は綾波です

僕の翼はアスカです

僕の翼はミサトさんです

エヴァなんていない

でも、それじゃあ、母さんとはふれ合えない

幾度となく感じた

エヴァと繋がる感覚

あれは間違いなく

母さんとの繋がり

愛情を感じた

嬉しいと感じた

ありがとう

ありがとう

ありがとう

僕に愛情をくれたヒトに

ありがとう

この大空に

翼を広げ

飛んでいきたいよ

悲しみのない

自由な空へ

翼はためかせ

行きたい

子どもの時

夢見たこと

今も同じ

夢に見ている

初号機に高速で近づく物体

それは、

槍。

初号機を貫き、

地に突き刺さる。

「あれは!？」

上空より飛来する

蒼の軌跡

エヴァンゲリヲン

6号機

M a r k . 6

「さあ、約束の時だ」

颯爽と現れる

双方の朱

「今度こそ、キミだけは」

凜と響く

閃光の声

「幸せにしてみせるよ」

少年の名は

渚カヲル。

「碇シンジ君」

オリジナル編 予告

レイとシンジを取り込んだまま凍結されるエヴァ初号機

行方をくらますゲンドウ

就任する新司令

ドグマへと投下されるエヴァ6号機

物語の謎を握るエヴァ1号機

襲来する使徒

覚醒するリリス

復活する第1使徒，アダム

正体があらわになるエヴァ4号機

遂に完成するエヴァシリーズ

甲，乙号機の完成

次々と選出されるチルドレン達

謎の組織，Seek

発動に至る人類補完計画

渚カヲルの陰謀

真紀波・マリ・イラストリアスの過去

式波・アスカ・ラングレーの復活

惣流・アスカ・ラングレー

金代リクヤの覚醒

綾波レイの意志

碇シンジの変貌

14人のチルドレン

第13使徒，タブリス

鳥の使徒，子宮の使徒

生命の実，知恵の実

ロンギヌスの槍

ノストラダムスの杖

ネブカドネザルの鍵

アダムのA・Tフィールド

アダムの意志

アダムの肉体

第四新東京市

エヴァンゲリオン初号機，弐号機

様々な重いが交差する中，碇シンジは何を思うのか

次回，エヴァンゲリオン シークレット編

オリジナル編 予告（後書き）

次よりエヴァンゲリオン シークレット編
オリジナル編ですね。

要は新劇場版のQが上映されていないからなので。
まあ、オリジナル要素を盛り込んだアニメ後半みたいなモンです。
お楽しみに

自作人物紹介計画（前書き）

今さらですが、自キャラの紹介をと思いました。

リクヤ君とマテルさん……しばらく出ないと思いますが……。

自作人物紹介計画

名前…金代 リクヤ 読み…かねしろ りくや

年齢…14歳 身長…163cm 体重…49kg

外見…黒髪の少しボサボサ気味。顔は中の上。

性格…物事は楽しむ性格で戦闘も割と楽しんでる。

階級…エヴァンゲリオン搭乗者，シクス・チルドレン
搭乗機…エヴァンゲリオン4号機，????

名前…是枝 ハルカ 読み…このえ はるか

年齢14歳 身長…145cm 体重…43kg

外見…金髪のセミロング。顔は可愛い。

性格…ボーッとしてることがほとんど。やるときはやる人。でも
ほとんどしない。

階級…NERV日本支部司令

名前…マテル・ニーフレグ 読み…まてる・にーふれっぐ

年齢…14歳 身長…154cm 体重…44kg

外見…茶髪のロング。顔は可愛い。

性格…なんかおどおどしてる。自分のすることに自信がない。

階級…エヴァンゲリオン搭乗者，エイツ・チルドレン
搭乗機…エヴァンゲリオン7号機

司令、就任

7日後

ジオフロント 緊急本部

モニターに映し出される初号機とMark. 6はいまだ大きな動きが見えない。

「何を考えてるのかしら……。あのエヴァのパイロットは」

「相互リンク、カットされました」

コンタクトを試みようとしたマヤの画面には通信不能の文字が映し出される。

「いまりツコが解析を行ってるわ。しばらく待ちましょ」

再び画面に目を向けるミサトの携帯がコール音を発する。

「はい」

『葛城さん、怪しい人物を確保しました』

「そう、身柄を確認して留置所に入れておきなさい」

『あの、実は紹介状を持っています……。』

「どこから？」

『……『ゼーレ』です』

「!？」

（『ゼーレ』が……？）

ミサトは少し俯いて考えるとこれからの安全を考え、司令室に通すように伝えた。

数十分後、

「遅いわね……」

腕時計をちらりと見て少し舌打ちをした。

「ゴメン、私ちょっと探してくるからここ、お願いね」

「「はい」」

司令室のドアを開けるとそこには座り込んでベソをかいている少女がいた。

見たところ、シンジ達とあまり変わらない年齢のようである。

それこそ、数日前に中学校屋上にてシンジと接触した人物であった。

「あなた……」

「ふえ……？」

最早、鼻声で顔も涙と鼻水でぐしゅぐしゅであり、全体的に汚い。しかし、少女はミサトを見るとその顔を歓喜に染めて、元気に立ち上がる。

「葛城さんですね！」

「ええ……まあ……」

「良かった。もしかしたら私、ここで餓死しちゃうんじゃないかって思っちゃいましたよ♪」

少女はいかにも元気な口調で一人でべらべらと喋っていた。

「あなたが『ゼーレ』からの紹介者かしら？」

「ええ！いかにも」

少女は持っていたバッグから封書を取り出すとミサトに手渡した。

「私、この度失踪した前司令に代わりここNERV日本本部の司令を務めさせて頂きます。是枝ハルカこのえといいます」

少女はにっこりと笑い、ミサトに握手を求めた。

（碓司令の失踪……。まさかここまで知られているなんて……）

そう。ゲンドウは2日前の目撃以来、とんと姿を見せていない。

それどころか、すでに第3新東京市にもいないのだ。

そして、副司令である冬月もまたゲンドウと同じく失踪している。

「ええ。こちらこそ、よろしく」

ミサトは握手する。

「こんな時に来て大変だったわね。こっちも色々大変だね……」

「ええ、そこで見ましたよ。エヴァ初号機に6号機」

「そ。せめて通信でも取れればいいんだけど」

ハルカはしばらく考える仕草を取るとポン、と手のひらにグーをおいて閃いたのポーズを取る。

「私、通信取れますよ♪」

ハルカは司令室へ入って行き、マヤのパソコンから6号機への通信画面を開く。

「ダメよ。すぐカットされちゃうわよ」

ハルカは画面を見て、しばらくパチパチとキーボードを叩いていたが、通信一つ手前の画面へ来ると袖をまくり上げた。

「やり方が悪いんですよ、これは暗号解読式のパスワードですから。えーっと……パスワードは『Angel』と『13』に『Table』……それから『Quicken』か」

ハルカはメモを見ながらそれらを覚えるように何回も読み直す。

「そのパスワードをどうするの？」

「えっとですね、これらのパスをそれぞれ0, 000001秒のスピードで打ち込むんです」

通信回線の画面を開き、それらのパスワードを高速で打ち込んでいく。

すると、回線の画面が無事開く。

『……おや』

「はーい、渚君。おひさ」

『待ちくたびれたよ、新司令』

「ゴメン、ゴメン」

2人はまるで友達同士のように話している。

「初号機は？」

『問題ないよ。完全に止まってる』

「そっか。葛城さくん、開いてるケイジってあります？」

「え？ あ、ああ。それなら第24ケイジが使えるかも……」

「と、いうことらしいよ」

『分かりました。誘導をお願いしますか?』

エヴァ6号機は地上へ降り立つとNERVのスタッフに誘導され、第24ケイジへと消えていく。

「これでよし♪」

ハルカはぽん、とキーボードを叩き、通信画面を閉じる。

ミサトはそれを神妙な面持ちで睨んでいた。

(『ゼーレ』からの贈り物……ってことか)

NERV エヴァパイロットロッカールーム

濡れた髪をタオルで拭き、残る水滴をふるふると首を振り払う。

何をしてもし絵になるような美貌を持つ少年、渚カヲルは緊張から解放され、しばしLCLとは違う空気の感じを楽しんでいた。

「ふう。老人達も随分と無茶な命令を出してくれたものだね」

USBメモリを少しの間見ていたが、すぐにポケットへとしまい込み、ロッカールームを後にする。

ジャケットを羽織り、正装をする。

そう、彼こそが、現在を持って

「副司令……?」

「ええ。本日付を持ってNERV日本支部、副司令を勤めさせていただきます。渚といいます。どうぞ、よろしく」

恭しく一礼し、にっこりと人のよさそうな笑みを浮かべる。

「悪いけど、こちらもそう言われて『ハイそうですか』なんて言える状況じゃないのよ」

「ですよー……」

ジャケットの内ポケットをさぐり、一枚の紙切れを取り出す。

「ゼーレからの紹介状です」

ミサトはそれを受け取り、軽く目を通す。

（右の者、渚カヲル 14歳にNERV日本支部 副司令を任ずる。

ゼーレ及び人類補完委員会議長 キール・ローレ

ンツ……、ね）

ふう、と溜息を一つ漏らし、書類から顔を上げる。

「ごめんなさい。確かに本物だわ」

「分かって頂けてなにより、です」

時は、

刻々と

近づいている。

それは、

人類の補完。

真なる

人類の補完を。

8番目の少女

NERV アメリカ第5支部 マグダラベース
地下200000m エヴァンゲリオン7号機封印地

十字架につるされた巨人は身動きをとらず、ただ力なくそこに在るだけだった。

そんな巨人を縛り付けるように次々と封印装甲が装着されていく。

「これが、私のエヴァンゲリオン……」

少女の名は、マテル・ニーフレッグ。

8番目の少女。

エヴァンゲリオン7号機専属パイロットに選ばれた少女である。

彼女は少し物憂げにエヴァを見上げていた。

「どうした？ ニーフレッグ」

「あ、加持さん……」

加持は現在出張中でここケルトアベース付きになっていた。

「不安か？ エヴァに乗るのが」

「……上手く扱えるかな、って思っ」

「そうか。明日だもんなあ、起動実験」

「……でも、私頑張ります！」

「そうか、頑張れ」

そのまま加持は仕事をするために封印地を後にする。

（Seekより選ばれた8番目……。なにか裏があるな……）

エヴァンゲリオン7号機 起動実験期日

『エントリープラグ、注水』

『A10神経接続開始』

『パイロット、心拍及び脳波、異常なし』

オペレーターの様々な声が飛び交う中、紫のプラグスーツに包まれた少女は目を閉じ、エヴァにのみ意識を集中させている。
数分後、エヴァの瞳に光が灯る。

『エヴァンゲリオン7号機、起動』

『了解。これより連動実験へと移行』

オペレーターの指示で徐々に前進する7号機。

『連動回路、異常なし。エヴァンゲリオン7号機、起動』

「ふう……」

マテルは溜め込んでいた二酸化炭素をはき出し、意識を落ち着ける。
(よかった……。動いた……)

ビキッ……

その時、7号機の瞳に強力な光が灯る。

『7号機、異常発生!!』

『パイロット、異常なし!!』

『暴走か!?!』

オペレーターの慌てふためく声を余所に7号機は大きく咆吼を上げる。

『グオオオオオオオ!!』

「私の仕事、ちゃんとできるかな……」

7号機は近くにあったパレットライフルを掴み、辺りへ乱射する。

「あと5分24秒以内にここの職員を全滅させなきゃいけないんだっけ……」

次々と辺りに血を飛び散らせ、職員が倒れていく。

「ちやんとできるかなあ……」

『固定ベークライト、急げ!』

そして次々とベークライトが7号機のまわりを覆う。

脚、腕と着水した部分から徐々に動かなくなる。

「あ……どうしよう……」

エヴァはA・Tフィールドを展開し、ベークライトを振り払う。

『LCL圧縮濃度をあと40上げろ!』

その瞬間、神経接続が解除され濃密なLCLがマテルを襲う。

「うぐう……」

マテルは意識を失い、7号機は停止した。

地下 情報回線収納所

加持は緊迫した面持ちでPCの画面を見ていた。

「なるほど……。このために……」

加持はコーヒーをひと啜りし、再び画面を見る。

（しかし、そうだとってもなぜNERV日本支部の地下に封印する必要がある……？）

画面をスクロールさせ、新たな情報を見やる。

（エヴァ7号機の起動実験の失敗……、やはり意図されたことだったのか……。

くわえて8号機の封印。なぜこの時期に……。

いや、もっと不自然なのはQ号機だ……。建設の中止……。

それに10、11号機の封印……。分からないことが多すぎる……。

……12号機に13号機!? そうか、だからエヴァが14体必要

なのか……)

この時、加持は背後から迫る影に

気付かなかった……。

帰ってきて（前書き）

月面基地 タブハベース

静かにたたずむ2体のエヴァ。

彼らはエヴァンゲリオン甲，乙号機。

彼らは待っていた。時が訪れる時を……。

そう，時が来ることを……。

帰ってきて

「現在、日本が所有するエヴァンゲリオンは、初号機、2号機、3号機、4号機、5号機、6号機です」

「現存するエヴァをほとんど独占、ね」

「及びバチカン条約の特別保護。これ以上ない待遇だわ」
NERV特別会議は深刻な様子で推し進められている。

「しかし、これらの内、初号機は先の事件で凍結。3号機、5号機は大破。6号機は別命あるまで凍結ですから使えるのは2号機と4号機です」

ミサトはガシガシと頭を掻く。

「おまけにリクヤの失踪でしょ？アスカとマリは重傷で出撃拒否。シンジ君とレイはいないし、これ以上ないくらい最悪な状況じゃない。こんな時に使徒が来たらどうすんのよ」

リツコは少し考える仕草をとり、ゆっくりと口を開く。

「0号機の復活、できるかもしれないわ」

「……え？」

ケイジに格納されている初号機には数々の配線が接続されている。
「なるほど……。シンジ君とレイのサルベージ、及び吸収されている0号機のコアの複製ね……」

先の戦闘で初号機は0号機のコアとシンジ、レイの肉体と完全にシンクロしてしまっていた。

そして、この作戦が初号機からの奪還作戦とも呼べるサルベージ計画である。

司令室

「よかったのかい？サルベージ計画，了承してしまつて」
イスに腰掛け，そう問うカヲルは資料に目を通し，作業を行っている。

「だつて，今ここで拒否したら私の評判ガタ落ちじゃん。ただでさえやりにくい職場なんだから」

ハルカはそう言つて机に突つ伏する。

「ふふっ。確かにね」

「リリースの封印はどうするの？」

「明日，6号機で再封印するつもりだよ」

「そっか」

ハルカは一つ伸びをすると再びPCへと目を落とす。

「加持さん……。余計なことするから……」

ハルカの目は少し哀しげだった。

「それにしても，よくこれだけの機能が使えましたね」

マヤはPCのデータを流し，情報を確認する。

「ここだけは使徒の被害を受けなかったのが不幸中の幸いね。大体のデータはこっちに残つてたもの」

リツコは必要なデータを複製し，サルベージに必要な情報を作成していく。

「ですが，先輩はスゴイですね。2日でサルベージ計画の要綱ができるなんて」

「原案は私じゃないわ」

「そうなんですか？」

「10年前に同じようなことがあって、それに手を加えたに過ぎないわ」

リツコのキーボードを打つ手が止まる。

「それで……その時の結果はどうだったんですか？」

「……失敗よ」

『綾波……？』

『碇君……？』

「サルベージ，開始！！」

初号機，プラグ内

シンジとレイは何もない空間を彷徨っていた。

『ここは……どこだろう……？』

『……』

音もない空間。

『呼んでる……』

『誰……？』

一つの影。

『ミサトさん……？』

『葛城さん……』

エヴァのパイロットして……。

戦う……。

それが仕事……。

そのために必要な……。

だから……。

使徒を……。

『嫌だ……』

『碇君……？』

『嫌だ！』

『嫌だ！嫌だ！もう嫌なんだ！！あんな怖い思いは、もうしたくない！！！！』

『碇君……！！』

『ここにいるんだ！！ここがいいんだ！！！！！！』

司令塔にアラート音が鳴り響く。

「何！？」

「パルス逆流！！」

「っ！せき止めて！！」

「ダメです！間に合いません！」

リツコの顔色が徐々に変わる。

「何が起こったの！？」

「……失敗……」

「！」

ミサトの顔も青ざめる。

『エヴァ，信号拒絶！』

『プラグ内，圧力上昇！！』

「電源落として！早く！！」

「だめです！プラグ，排出！！」

エントリープラグからLCLがすべて排出される。

「シンジ君！レイ！」

『碇君……』

『あや……なみ……』

『帰りましょう……？』

『もう、嫌だ……』

『大丈夫……。怖い事なんてない……』

レイはそつとシンジを抱き寄せる。

『綾波……』

『私が……ずっとそばにいる……。だから……』

ぱしゃん……

「「「!？」」」

排出されたはずのLCLの中にシンジとレイ、2人の姿があった。

「……シンジ君！レイ！」

ミサトは歓喜の声を上げ、2人を抱きしめる。

「ありゃ、驚いた」

「まさか成功するなんて……」

ハルカとカヲルはその状況を驚嘆の面持ちで見ていた。

その傍らには、一つのコアが転がっていた。

帰ってきて（後書き）

なんか超ぐだぐだな話に。
専門用語とか一切わかりませーん。

閉鎖された空間の中で

セントラルドグマ降下扉前

シンジとレイのサルベージ作戦が無事成功し、NERVも本部移設作業を開始。

その最中、プラグスーツに着替えたカヲルと数名の技術部員と諜報部員はMark. 6の起動準備を始めていた。

「よろしいのですか？ 副司令」

「大丈夫だよ。初号機の事件も終わった直後で誰もこちらには手は回らないだろうからね」

「そうでしょうか？」

「貴方は意外と心配性ですね、剣崎さん？」

諜報部第一課所属、剣崎キョウヤ。

諜報部の動きを取り仕切るNERV内で黒い噂の絶えない男である。また、ミサト、リツコ、加持の大学時代の友人でもあった。

「いいえ。私はあくまで諜報部としての仕事に徹しているだけです」

「なるほど。噂の元を隠すのも仕事でしたね」

「ええ」

「貴方も大変なようですね」

『副司令、Mark. 6の起動準備が整いました』

技術部員の声に頷くカヲル。

「それじゃあ、後のことはお願いするよ」

「わかりました」

ゆっくりと封印扉が開く。

「さあ、行こうか。Mark. 6」

NERV内 第一病室

ガタン

「うう……」

響く音にシンジは目を覚ました。

「綾波……？」

「……起きたのね、碇君」

シンジはレイの無事な姿を見て安堵の息を漏らす。

「よかった……。生きてた……」

「そうね。……碇君、ありがとう。私を助けてくれて」

「いや……。僕の方こそ、ありがとう」

しかし、流石に無事とはいかずお互いの包帯だらけの姿を見て改めて戦闘の激しさを痛感させられる。

「「シンジー!!」」

自動ドアが開き、アスカとマリが同時に入ってくる。

「アスカ! マリも、どうしたの?」

「どうしたもこうしたもアンタ大丈夫なの?」

「そうだよ! 目覚めたらなんかいきなり初号機を中心に変なことになってるし何だったの?」

すっかりいつもの調子を取りもどしたかに思われる光景を見てシンジは思わず吹き出してしまった。

そのころ

NERV本部地下　ターミナルドグマ

「やっと最下層か……」

ドグマを降下していたカヲルは地面を確認し、一息つく。音もなく降り立ったMark. 6は光輪を消し、封印場へと進む。

扉が重い音を上げて開き、白い巨人の姿が露わになる。

微弱であるが周りにA・Tフィールドが発生している。

「やはり先の戦闘で封印が弱まっていたね。ロンギヌスの槍だけじゃ止められないか……」

Mark. 6は大きく踏み込み、白い巨人へ持っていた『ノストラダムスの杖』を突き刺す。

「これでしばらくは持つ、かな……」

ドクッ

「っ!？」

カヲルの中で何かがざわめく感覚がする。無数の虫が体内を這い、食い荒らす感覚。

「まさか……これは!？」

Mark 6はすぐに杖を手放し、一步後ろへ下がる。
頭痛の続く頭を押さえつつ、体制を立て直し地上を目指す。

「もう、覚醒を始めているのか……!？　それとも……」

降下時の余裕は嘘のようになく、それから数時間も後にカヲルはドグマが出るのだった。

そして、そのころ

元第3新東京市　郊外では一つの人影が確認されていた。

「うーわ、暑っ」

少女は額に浮かぶ汗を腕でぶっきらぼうに拭い、照り続ける太陽を細目で睨む。

「ワタシが来るんだから少しくらい抑えてくれたっていいじゃない……」

彼女は着ていたワンピースの胸元をバタバタと煽ぎ、風を送る。

「それにここホントにあの第3新東京市なの？　焼け野原みたいになってんじゃない……」

少女の持っている鞆からはNERVの文字が入ったIDカードが見えていた。

10th child

Come here “TOKYO-3”

Her name Kikyo Uta kaze

Her EVANGELION-Q

Q is Quicken ing

Quicken ing || EVANGELION-8

Waking up EVANGELIONS

閉鎖された空間の中で（後書き）

最近スランプ気味でお楽しみ頂けないかもしれません……。。

衝突

「よかったね。アスカも無事退院できて」

「まあね。でもおかげで身体が大分鈍っちゃったわよ」

「……私、先行くから」

「あ、綾波？」

怪我も全快し、退院したシンジ、レイ、アスカはNERV施設内を徘徊する。

第10の使徒襲来時の被害により、本部移設の計画が上がっており本部内は慌ただしい状況になっている。

「でも、マリは残念だね。もう少し入院してなくちゃいけないし」

「そうね。ま、使徒が来ても私が何とかするけど」

「でも、今はとても大変な状況よ。エヴァが2機しか稼働しないのだから」

「だから、そこは私が一人で迎撃できるわよ」

そんな3人の背後から迫る人影が。

「碇くん！」

「うわっ!？」

ハルカはダッシュでシンジに飛びつく。

「ちょ、誰!？」

「構ってー!!！」

そうして数分ジタバタした後、レイとアスカに取り押さえられ事は収まった。

「誰よアンタは！」

「……見たことが無い人だわ」

「ヒドイー！ 誰も構ってくれないー！！」

ハルカは押さえつけられてもなおジタバタ暴れている。

「むがー！ じゃあ司令命令！！ 私に構えー！！！」

しばしの沈黙。

「……司令？」

「バーカ、司令は碇司令なのよ。分かりやすい嘘なんか吐かない方がマシだわ」

「信じてくれない」

ハルカはめそめそと泣き始める。

「泣かしたらダメだよ、アスカ」

「明らかに不審者でしょ、コイツ」

「あら、みんな何してるの？」

そこに荷物を運ぶ途中だったミサトが通りかかった。

「……葛城さん。不審者を捕まえました」

「ミサト。いくら本部移設で忙しいからって警戒の手抜いたらダメじゃない」

「2人とも司令を押さえつけてどうしたの？」

「「「……え？」」」

シンジとアスカはハルカとミサトの顔を交互に何度も見ながら叫んだ。

「何！？ コイツホントに司令だったの！？」

「ミサトさん！？ じゃあ、父さんはどうなったんですか！？」

「そうよ？ この人ホントに司令なの。」

それと碇司令は行方不明みたいなのよ。副司令もね」

「……この子、ID持ってる」

「うわーん！ みんなヒドロー」

3人はゲンドウとハルカの威厳の違いに呆然とするしかなかった。

その頃

本部ゲート前

「何だ？ お前は」

「あのおう、ここってNERV日本本部であってますよね？」

「そうだが……ここは立ち退きの命が下っているんだぞ。すぐに帰れ」

「そんなつれないこと言わずに……。あ、なんかいますよ？」

「な、どこに何が！」

少女は後ろを振り向いた警備員の首に手刀を入れ、気絶させる。

「いやー、ごめんなさいねえ。私の持つてるID受け付けなくて」
そう言っって少女は警備員のバッグの中からIDを取り出す。

「な、何をしている！？」

「あ、見つかった」

しかしその警備員もすぐに前のめりに倒れた。

「やほう。ついでにそのIDで私達も入れてくれない？」

「見つかるのを助けてやったんだ。そんぐらいはいいだろ？」

少女と少年は不敵に笑い、もう一人の少女を見る。

「まー、いいけど。一応そっちの身元ぐらいは確認させてくれる？

私も敵を内側に入れたくないし」

少女は倒れている警備員の手から銃を取り、二人に向ける。

「アンタも『Seek』から招集されたチルドレンなんでしょ？」

考えてることは一緒ってコトよ」

「……へえ。じゃあ、貴方達もチルドレンなの？」

「まあね。俺はアレス・B・ストラトス。トウウェルスチルドレンだ」

「私はシュナス・F・ダニアン。イレヴンスチルドレンよ。二人ともティベリアベースから来たの」

「あー、私はテンスチルドレンの歌風キキョウ。ゲルゲサベースから」

シュナスとキキョウは握手をし、敵意がないことを確認する。

「確かココには、ファーストにセカンド、サード、フォース、フィフス、シクス、セヴンスがいるんだっけ？ 多すぎない？」

「待て。確かシクスは行方不明だったろ？ セヴンスは戦死と聞いた」

「どっちにしろジャパンが保有するエヴァが0〜6号機まで。バチカン条約の特別保護。なんでここだけかってハナシよね」

シュナスは『やれやれ』という風に首を振る。

「そりゃあ、ココが他よりも使徒の出現率が高いからだろ。委員会うゑはこんなところに俺らを呼び出して何をするつもりなんだろうね」

「とりあえず、委員会の使いの人に話だけでも聞きましょう」

キキョウは持っていたIDで扉を開き、3人は施設へ侵入した。

衝突（後書き）

なんかここら辺からほのぼのムードが入ってきますね
まさかこのタイミングでか

新たなチルドレン

「何をしているんだい……?」

数時間に及ぶハルカの暇つぶしはカヲルの一言によって終了した。

「やっほー渚君」

「あのね。君には司令としての仕事沢山あるんだ。ここで油を売っている暇は無いんだよ?」

「はあい……」

ハルカはすぐごとエレベーターへと向かった。

ようやく開放されたシンジは一つ溜息をつく。

カヲルはシンジに手をさしのべた。

「司令が迷惑をかけてしまったね。済まない」

「あ、いや。どうってことないよ。えと……」

「僕は渚カヲル。カヲルでいいよ、碇君?」

「あ、僕もシンジでいいよ」

シンジとカヲルは話をしながら廊下を歩く。

「僕はこの前フィス・チルドレンとしてここに来たんだ」

「そっか。僕はもう何ヶ月も前にこっちに来たんだ。父さんに呼ばれて」

廊下を歩いているとシンジは一人の人物とぶつかってしまった。

「うわっ! ごめんなさい」

「イタタ……。誰よ、もう……!」

「大丈夫かい? シンジ君」

「キキョウ、大丈夫?」

「前見て歩かないからそんなことになるんだぞ!」

シンジは目の前の3人の人物を見て少し躊躇いながらも話しかける。

「えっと、ごめんなさい。僕が前見て歩いてなかったから……」

3人は少しお互いの顔を見合っていたが不意にシュナスは口を開いた。

「見つかったわね……」

「ばっちりな。しかもパイロットだぜ？」

「おや。君たちは確か他の国のパイロット達だね？ 到着が早かったみたいじゃないか」

カヲルはにっこりと笑いながら3人に近づく。

「あんたは確かファイフスの渚だったっけ？ 俺はアレス、エヴァ1号機のパイロットだ」

アレスはカヲルに握手を求める。

「うん。こっちこそよろしく頼むよ」

カヲルはその握手に答え、アレスの手を取る。

シンジはその光景を啞然とした表情で見ていた。

「それで？ この子がサードチルドレンの碇君？」

「え、ええ。まあ……」

「やーん！ 可愛い——！」

シュナスはしばらくシンジをジロジロ見ていたが突然飛びつくやいなやそう叫んだ。

今日だけで2回も飛びつかれてシンジはびっくりしっぱなしだったという。（後日談）

「噂には聞いてたんだけどね！ 使徒殲滅に一番活躍したって!!」

シユナスは相変わらずシンジにぐりぐりと頬を擦り付ける。

「ちょ、ちょ、痛いです!」

「シユナスのそういうところ初めて見たが……」

「第一印象から落ち着いた人だと思ってたけど……」

「くす。世界には面白い人達がいるみたいだね」

そんな修羅場（!?!）に偶然出くわしたアスカはそのおかしな状況に戸惑う。

「ちょ、は？ 何この状況？」

「やあ、式波さん」

「何でシンジはこんな変なヤツらに絡まれてるワケ……?」

かくかくしかじかとカヲルはアスカに状況を伝える。

「はあ。じゃ、アンタらは他の国のチルドレンなワケ」

「まー、そーいうことになるかな。それで特命でジャパンに集合してるの」

「で、その特命の内容がこちらに詳しく伝わっていないから何がしたいのかよく分からないってハナシだ」

「正体不明の特殊機関『Seek』ね。噂じゃ『ゼーレ』とも繋がってるのか」

「そうなんだ……」

シンジはあまりに詳しすぎる内容について行けず、呆然とするしかなかった。

Seek

日本 旧兵庫

「ここか……」

剣崎キョウヤは一つのアパートの前に立っていた。

数週間前、彼の元に不自然なメールが届いたのだ。

差出人は加持リョウジ。

旧友の名、しかもその何日も前から海外へ出たまま連絡も付かない人物からのメールは明らかに不自然な物だった。

『剣崎へ

このことは俺がお前に直接言っておきたかった。

しかし、俺にはそう時間もないらしい。

このメールに地図を添付する。その地図のマークされた所に行つて
真実を確かめてほしい。

葛城に『済まない』と伝えてくれ。

それと3日後に葛城に伝言を伝えてほしい。

真実は君と共にある、と。

加持」

何一つ核心を突ける物はなかった。

しかし、旧友の頼み、そして以前より伝えられていた『人類補完計画』の話を合わせるとやはり彼にはその頼みを断ることはできなかった。

約束通り、キョウヤはメールが来た3日後にミサトへ加持の伝言を伝えた。

「……と、言うことだそうです」

「っ……。アイツ……ホントに馬鹿ね……」

ミサトはそのまま泣き崩れてしまった。

ミサトが加持から何を伝えられたのか彼には分からなかったが彼は己のすべきことを見つめ、挑もうとしていた。

キョウヤは一角の部屋のノブを掴み、ゆっくりと回して中へ突入する。

「貴方は……!?!」

——ドンッ!

鳴り響く銃声。

キョウヤは地面に仰向けに倒れていた。
彼の胸からは鮮血が止めどなく溢れ、床を塗らしていく。

「す、まない…な。……加持。俺も、…ここまでの、ようだ……ゴ
フッ」

キョウヤは喉からも溢れる鮮血に死の感覚を感じながらふっと口を
つり上げて笑った。

「まさか、貴方が……『Seek』、を……」

キョウヤの腕は力なく床に落ちた。

アメリカ マグダラベース

コツ、コツと拘留所に足音が響く。

「出る、ニーフレッジ。お呼びがかかった」

「私、ですか……」

先の7号機事件により拘留所入りになっていたマテルは上官の声に
ゆっくりと頭を上げた。

「まさか、私の処刑が決定したとかですか？」

「違う。招集命令が下ったのだ」

「何処へ？」

「……ジャパンだ」

ゼーレ 本部

「着々と準備は整い始めている」

「死海文書に記載されている使徒はあと3体」

「そしてその内の一体は既に我らが手中にある」

「しかし、今はその時ではない」

「我らが補完計画を遂行するために与えた力を捨てるか、碇」

「だが、碇は我々が目指すものなど見てはおらぬ」

「己が持つ計画を目指す男だ」

「ちょうど捨て時、ということだ」

「新たに送った駒、アレは実に使える」

「我々の命令には逆らわぬ犬だ」

「エヴァンゲリオン乙号機、そして甲号機は完成も近い」

「エヴァンゲリオン1号機もまた同様」

「こちらの準備はいつでもできている」

「全ては人類補完計画のため、だ」

せめて、人間らしく

臨時発令所

「第09監視衛星が未確認飛行物体を捕捉。最大望遠で出します」
モニターに鳥のような姿の物体が映し出される。

>i14690—623<

「パターン青、間違いありません。使徒です」

「ここから一定の距離を保っています」

「ということは、降下接近の機会をうかがっているのか、それとも
その必要もなくここを破壊できるのか」

ミサトは腕を組み、しばらく考えると口を開く。

「2号機は発進。0号機は？」

「実戦武装は施されていませんが、辛うじて」

「そう。0号機と4号機はバックアップとして発進準備。アスカ、
行けるわね？」

『バッチリよ』

アスカはモニターの前でVサインを作る。

「副司令も問題ありませんね？」

『ええ。作戦部長が決めたことなら従いましょう』

4号機に搭乗したカヲルも同意する。

「2号機、発進！！」

2号機は地上に出撃し、ポジトロンライフルを構える。

「迎撃システムの稼働率わずか5%。最悪ね」

目標をレーダーが狙うが距離が離れすぎており上手く捉えることができない。

「っく！ さっさとこっちに來なさいよ！ 焦れたいわね！！」
そして、レーダーが使徒を捉える。

その瞬間、2号機は光に包まれる。

「！？ 敵の指向性兵器なの！？」

「いえ、熱エネルギー反応なし！」

「アスカの精神波長が乱れていきます！ 精神汚染が始まります！
！」

「何ですって！？」

「使徒の心理攻撃！？ 使徒にヒトの心が理解できるの？」

2号機はよろけるがすぐに使徒へ向けてライフルを発射する。

「こんちくしょおお！！」

しかし、その攻撃は使徒に当たることなく大きく逸れる。

『陽電子消滅！』

「ダメです！ いまだ射程距離外です！！」

その状況を見ていたアレスはシンジに話しかけた。

「なんだか、面白いことになってきたな」

「っ！ 何が面白いんだよ！」

「そこ、静かにして！」

アスカは乱心し、辺りにライフルを撃ちまくる。

「光線の分析は？」

「可視波長のエネルギー波です。A・Tフィールドに近いものが、詳細は不明です!!」

「この光はまるでアスカの精神波長を探っているように見えるわ。……使徒にヒトの心が理解できるの?」

2号機はライフルを手放し、頭を押さえもがく。

「ぐううう……!!」

「アスカ! 戻って!」

「うう! 私の心に入ってこないで!!」

アスカはこちらの話が聞こえず、苦しみ続けている。

「長距離ポジロンライフルは?」

「最終段階です。収束機作動中行けます」

「発射!!」

ミサトの合図に4号機は引き金を引き、ライフルを発射する。

陽電子は使徒のA・Tフィールドに阻まれ、霧散する。

「ダメだ。葛城さん、この距離でこの程度のエネルギーじゃA・Tフィールドを貫けない」

「ではどうするのですか?」

「今、この状況を打破できるものはない、ということですよ」

「そんな!」

「僕が初号機で出ます!」

シンジは叫ぶがミサトは首を横に振る。

「ダメよ」

「どうして?」

「考えれば分かるでしょう?」

シユナスはシンジの肩に手を置く。

「敵はこっちの精神を攻撃してくる。迂闊に近づけば、ね」

「でも、このままじゃアスカが!」

ミサトはしばらく苦い顔で考えていたが意を決したように顔を上げる。

「レイ。ドグマに降りてロンギヌスの槍を使って」

「……分かりました」

「ダメ。許可できない」

ハルカはその案を承諾しなかった。

「何故ですか？」

「リリスの封印は強力じゃないといけない。リリスの封印は日を追うごとに弱まっているし、今ここで封印を解けばどうなるか分からない」

「……今はアスカを助けることが第一です。レイ！」

ミサトの指示にレイはすぐにドグマへと降りる。

0号機は白い巨人に刺された『ロンギヌスの槍』を抜き、地上へと出る。

『0号機、投擲体制。誤差修正完了』

「カウントダウン、開始」

「10」

「9」

「8」

「7」

「6」

「5」

「4」

「3」

「2」

「1」

「0！」

その合図と共に二又だった槍先は一つに巻かれ、0号機は使徒に向かって槍を投げる。

槍はまっすぐに使徒へ飛び、使徒を貫いた。

「目標消失」

「2号機回収。第2ケイジへ」

「ふう」

ミサトは安堵の溜息をつく。
しかし、

「葛城さん。命令違反です、異論は？」

「……ありません」

「そう。拘留所に連れて行くけどいいかしら？」

「はい」

ミサトは数名の諜報部員に連行されていく。

「アスカ！」

シンジとマリとレイは急いでアスカの元へ行く。

ベッドに寝かされているアスカの目は虚ろだった。

「アスカ？」

「そっとしておいてあげなさい」

リツコは持っていた資料に目を通しながら言った。

「精神に負担をかけすぎたのよ。助けるのが少し遅かったわ」

「……そんな」

「マリ、2号機の臨時パイロット頼めるかしら」

「……はい」

第11の使徒、殲滅

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9808j/>

エヴァンゲリオン シークレット

2011年1月19日10時02分発行